

福岡市西区大字片江

片江辻遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第40集



1977

福岡市教育委員会

福岡市西区大字片江

片江辻遺跡

片江地区区画整理事業地内遺跡の発掘調査報告書

2

昭和52年3月

福岡市教育委員会

序 文

文化財行政の当面する課題の一つに、埋蔵文化財の保護対策があります。

近年の産業経済の発展に伴う諸開発事業によって、消滅する遺跡の数は増加の一途をたどっており、この傾向は最近の経済事情のなかにおいても変化のない有様であります。福岡市とて例外ではなく宅地造成その他による開発はとどまるところを知らないのが現状であります。

当教育委員会では、やむをえずして保存できない文化財については事前の発掘調査をもって記録保存につとめています。

今回の発掘調査は、片江区面整理地域内における緊急調査で、国庫補助事業により実施しました。この調査は、すでに昭和47年度に古墳群を対象として実施しており今回の調査は第2次の発掘調査です。さらにこの地域内には甕棺墓などの存在が知られており今後継続事業として発掘調査を実施していく予定です。

発掘調査の成果につきましては、報告書に見られるように古墳時代の住居跡と、それをとり囲むと思われる溝状遺構、さらに棚状遺構などが検出され、この時代の生活及び集落構造を究明するうえで多くの成果をあげることができました。これも地元作業員を始め多くの人達の埋蔵文化財への深いご理解とご協力によるものであって、深甚の敬意を表するものであります。

本報告書が地域住民はもとより市民各位の文化財保護思想の育成に活用されますと共に、学術研究の分野において役立つことを願うものであります。

昭和52年3月

福岡市教育委員会

教育長 戸 田 成 一

凡 例

- 1 本書は福岡市西区片江區画整理事業の計画にともない、昭和50年度国庫補助事業として福岡市教育委員会社会教育部文化課が、昭和50年9月16日から12月4日までの約3か月にわたって発掘調査を実施した片江遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書の執筆と編集は、塩屋勝利と力武卓治が分担、協議して行なったが、福岡市文化課の柳田純孝、二宮忠司、飛高憲雄、井沢洋一、折尾学、柳沢一男、山崎純男氏等の助言と協力をえた。
- 3 遺構、遺物の写真撮影および実測図の作成、トレースは、塩屋と力武が分担して行なった。
- 4 写真図版の遺物ナンバーは、押図の遺物番号と一致する。
- 5 遺物実測図の縮尺は、須惠器、土師式土器、陶磁器を $\frac{1}{8}$ か $\frac{1}{6}$ に、石製品、鉄製品を $\frac{1}{2}$ （兼玉は $\frac{1}{4}$)に統一した。なお遺物写真の縮尺は、石製品が $\frac{1}{2}$ であるほかはすべて不統一である。
- 6 遺構実測図のうち住居跡実測図は $\frac{1}{60}$ に統一し、各々にその計測値表を付した。
- 7 表紙題字は有元成瓊氏（西部書作家協会初代会長・九州女子大学教授）よりいただきました。

本 文 目 次

第 I 章	はじめに.....	1
1	発掘調査に至るまで.....	1
2	発掘調査の組織と構成.....	2
第 II 章	発掘調査の概要.....	3
1	位置と環境.....	3
2	発掘調査の経過.....	7
第 III 章	調査の記録.....	9
1	遺跡の立地.....	9
2	調査区の設定.....	9
3	I 区の調査.....	9
4	II 区の調査.....	12
	欄状遺構.....	12
5	III 区の調査.....	13
	第 1 号溝.....	14
	第 2 号溝.....	15
	第 1 号住居跡.....	16
	第 2 号住居跡.....	26
	第 3 号住居跡.....	31
	第 4 号住居跡.....	32
第 IV 章	ま と め.....	38
	あとがき.....	43

挿 図 目 次

Fig. 1	片江辻遺跡周辺遺跡分布図	(縮尺 $\frac{1}{25,000}$)	第II章—1	5
Fig. 2	片江區画整理事業区域図	(縮尺 $\frac{1}{10,000}$)	第II章—1	6
Fig. 3	片江辻遺跡地形図	(縮尺 $\frac{1}{600}$)	第III章—2	10
Fig. 4	I区出土須恵器実測図と土層断面図	(縮尺 $\frac{1}{3} \cdot \frac{1}{100}$)	第III章—3	11
Fig. 5	柵状遺構実測図	(縮尺 $\frac{1}{60}$)	第III章—4	12
Fig. 6	II区出土石器実測図	(縮尺 $\frac{1}{2}$)	第III章—4	13
Fig. 7	柵状遺構出土須恵器実測図	(縮尺 $\frac{1}{3}$)	第III章—4	13
Fig. 8	第1号溝出土遺物実測図	(縮尺 $\frac{1}{3}$)	第III章—5	14
Fig. 9	第2号溝出土須恵器実測図と第2号溝土層断面図	(縮尺 $\frac{1}{3} \cdot \frac{1}{40}$)	第III章—5	15
Fig. 10	第1号住居跡実測図	(縮尺 $\frac{1}{60}$)	第III章—5…折りこみ…16,	17
Fig. 11	第1号住居跡出土須恵器実測図(1)	(縮尺 $\frac{1}{3}$)	第III章—5	18
Fig. 12	第1号住居跡出土須恵器実測図(2)	(縮尺 $\frac{1}{3}$)	第III章—5	19
Fig. 13	第1号住居跡出土須恵器実測図(3)	(縮尺 $\frac{1}{3}$)	第III章—5	21
Fig. 14	第1号住居跡出土土師式土器実測図	(縮尺 $\frac{1}{3} \cdot \frac{1}{6}$)	第III章—5	22
Fig. 15	第1号住居跡出土石製品実測図	(縮尺 $\frac{1}{2}$)	第III章—5	25
Fig. 16	第2号住居跡実測図	(縮尺 $\frac{1}{60}$)	第III章—5…折りこみ…26,	27
Fig. 17	第2号住居跡かまど実測図	(縮尺 $\frac{1}{60}$)	第III章—5	27
Fig. 18	第2号住居跡出土須恵器実測図	(縮尺 $\frac{1}{3}$)	第III章—5	28
Fig. 19	第2号住居跡出土土師式土器実測図	(縮尺 $\frac{1}{3} \cdot \frac{1}{6}$)	第III章—5	29
Fig. 20	第3号住居跡出土須恵器, 土師式土器実測図	(縮尺 $\frac{1}{3}$)	第III章—5	31
Fig. 21	第3, 4号住居跡実測図	(縮尺 $\frac{1}{60}$)	第III章—5…折りこみ…32,	33
Fig. 22	第4号住居跡出土須恵器実測図(1)	(縮尺 $\frac{1}{3}$)	第III章—5	33
Fig. 23	第4号住居跡出土須恵器実測図(2)	(縮尺 $\frac{1}{3}$)	第III章—5	34
Fig. 24	第4号住居跡出土土師式土器実測図	(縮尺 $\frac{1}{3}$)	第III章—5	35
Fig. 25	第4号住居跡出土刀子実測図	(縮尺 $\frac{1}{2}$)	第III章—5	37
Fig. 26	III区ピット出土麻玉実測図	(縮尺 $\frac{1}{3}$)	第III章—5	37
Fig. 27	第1, 2号住居跡切り合い関係実測図	(縮尺 $\frac{1}{60}$)	……………折りこみ…40,	41

写真図版目次

	本文対照頁
発掘作業員のみなさん	2
PL. 1 片江辻遺跡周辺航空写真	3
PL. 2 (1) 片江辻遺跡航空写真(昭和51年6月撮影)	9
(2) 片江辻遺跡航空写真(昭和51年6月撮影)	9
PL. 3 (1) I区全景 (2) 第1トレンチ (3) 第2トレンチ	10
PL. 4 (1) II区発掘作業風景 (2) II区遺構全景	12
PL. 5 (1) 柵状遺構 (2) 柵状遺構土器出土状況	12
PL. 6 (1) III区遺構全景 (2) III区遺構全景	13
PL. 7 (1) III区第2号溝 (2) 第2号溝土層断面	15
PL. 8 (1) 第1号住居跡 (2) 第1号住居跡かまど	16
PL. 9 (1) 第1号住居跡遺物出土状況 (2) 第1号住居跡出土石製品	16, 26
PL. 10 (1) 第1号住居跡出土須恵器	18
PL. 11 (1) 第1号住居跡出土須恵器 (2) 第1号住居跡出土土師式土器	19, 21, 22
PL. 12 (1) 第2号住居跡 (2) 第2号住居跡	26
PL. 13 (1) 第2号住居跡かまど (2) 第2号住居跡かまど断面	27
PL. 14 (1) 第2号住居跡出土須恵器 (2) 第2号住居跡出土土師式土器	28, 29
PL. 15 (1) 第3号住居跡 (2) 第3号住居跡遺物出土状況	31
(3) 第3号住居跡出土須恵器・土師式土器	31
PL. 16 (1) 第4号住居跡 (2) 第4号住居跡	32
PL. 17 (1) 第4号住居跡出土須恵器	33, 34
PL. 18 (1) 第4号住居跡遺物出土状況 (2) 第4号住居跡出土土師式土器	35
(3) 第4号住居跡出土鉄製品	37

目 次

Tab. 1	片江辻遺跡周辺主要遺跡一覧表	第Ⅱ章—1……………4
Tab. 2	第1号住居跡計測値表	第Ⅲ章—5…折りこみ…16, 17
Tab. 3	第1号住居跡出土須恵器一覧表	第Ⅲ章—5……………23, 24
Tab. 4	第1号住居跡出土土師式土器一覧表	第Ⅲ章—5……………24
Tab. 5	第2号住居跡計測値表	第Ⅲ章—5…折りこみ…26, 27
Tab. 6	第2号住居跡出土須恵器一覧表	第Ⅲ章—5……………30
Tab. 7	第2号住居跡出土土師式土器一覧表	第Ⅲ章—5……………30
Tab. 8	第3号住居跡出土須恵器一覧表	第Ⅲ章—5……………31
Tab. 9	第3号住居跡出土土師式土器一覧表	第Ⅲ章—5……………31
Tab. 10	第4号住居跡計測値表	第Ⅲ章—5…折りこみ…32, 33
Tab. 11	第4号住居跡出土須恵器一覧表	第Ⅲ章—5……………36
Tab. 12	第4号住居跡出土土師式土器一覧表	第Ⅲ章—5……………37

第 I 章 はじめに

1 発掘調査に至るまで

片江地区土地区画整理事業にかかる区域は、南北は油山山麓から神松寺まで、東西が堤から七隈に至る広大な面積に及んでおり、当該地区内の埋蔵文化財について昭和46年度に分布調査が実施された。その結果、山麓部に古墳群があり、丘陵部には甕棺墓、住居跡等が存在することが判明した。

第1次発掘調査は昭和47年度の国庫補助事業として区画整理事業地内に所在する古墳6基、すなわち片江2～4号墳と6～8号墳を対象として実施された。その成果については、すでに報告書が刊行されているとおりであるが、さらに特筆すべきは、調査された古墳群の中で1つの単位群を構成する片江6～8号墳の3基の古墳が現地で保存されることになったことである。このことは、発掘調査が開発を前提とした緊急調査であったにもかかわらず、文化財保護に対する地元の方々のご理解によって現地保存がなされたという点で重要な意義を有するものである。また、この古墳群は福岡市立歴史資料館によって模型が製作され同館に展示されており、現地の古墳とともに文化財の身近な教材として活用されている。



第1次発掘調査（片江6～8号墳）

昭和49年12月になって、それまでの片江区画整理事業準備委員会が発展解消し、片江土地区画整理組合が正式に設立され、具体的に区画整理事業が推進されることになった。計画の具体化に伴い、福岡市教育委員会は、区画整理事業地内に包蔵されている甕棺墓および住居跡等の調査について、区画整理組合と協議を行ない、(1)福岡市西区大字片江字天神地区、(2)片江字辻地区、(3)片江字西地区の3地点を昭和50年度の国庫補助事業として発掘



片江6～8号墳模型（福岡市立歴史資料館展示）

2 発掘調査の組織と構成

調査するところとなった。

発掘調査は昭和50年9月16日より着手し、天神地区および辻地区については予定どおり終了したが、西地区については区画整理事業の計画との関係で、翌年度以降に持ち越すことになった。

2 発掘調査の組織と構成

1 発掘調査の組織

調査委託者 片江土地区画整理組合

調査主体 福岡市教育委員会

2 発掘調査の構成

調査担当 福岡市教育委員会社会教育部文化課埋蔵文化財係

事務担当 清水義彦 三宅安吉 國武勝利 木村義一 佐藤正恵 窪田千恵子
柴田陽子 柴田美絵

発掘担当 堀屋勝利 力武卓治

資料整理 花畑照子 高倉栄美 宇美富子 百武謙治

調査協力者

広田長登 大穂亮一 磯山茂十郎 松隈和美 八尋良平 大穂初實 鶴田源太郎
石橋清樹 鶴田 忠 森住千代城 石橋俊次 花田信雄 大津綱治 松尾和二郎
八尋益記 渡原義孝 岡部仁生 (片江土地区画整理組合)
大穂儀郎 大穂金作 大穂恒季 柴田清美 花田シズエ 八尋竹子 大穂洋子
花田房子 松尾タキノ 鶴田ナヲ 青木ナオエ 八尋ミヨシ 三穂ムツ子 大穂アサ子
田角由子 八尋カオル 田角ナツエ (発掘調査作業員)
鈴木勲一郎 松尾誠二 (小松建設工業株式会社)
日下部 直 岡部直好 龍 陽子 本荘陽子 広田一幸 広田長登 (土地所有者)

第 II 章 発掘調査の概要

1 位置と環境 (Fig.1 Tab.1 PL.1)

福岡平野の西部を占める早良平野は、東側を油山山塊より派生して北へ突出する鴻ノ巣山(標高 100.5 m)を中心とした平尾丘陵によって限られ、広義の福岡平野と区分される。この早良平野東縁部は、油山北麓より分岐していくつかの低平な丘陵が細長くのび、室見川を中心河川として展開する西側の広大な平野部とは異なり、地形的に1つのまとまった小地域を画している。この地域の主要河川である廻井川は、油山東北麓の谷間に源をもち、その支流の片江川、一木松川、駄ヶ原川などの小流が丘陵の間を開析して流れ、流域に狭少な沖積地を形成する。これらの小支流は友泉付近で合流してさらに北流し博多湾に注いでいる。

片江土地区画整理事業の対象区域は、この地域のほぼ中央部を占めている。南北は片江川下流にかかる神松寺橋を北限とし、南は片江川の源、油山北麓の鳥越までの約 2.4 Km の範囲であり、東西は金山の丘陵と堤から片江にのびる丘陵西側斜面に挟まれた南北に長い区域である。地形的には片江川によって開析された沖積地が大部分を占め、南奥部の洪積丘陵と、東部の堤から片江にのびる丘陵の西側斜面をも含んでいる。この地域を含む廻井川流域一帯は、律令時代の早良郡毗伊郷に比定される地域であり、その範囲は福岡市に合併する以前の早良郡廻井川村とほぼ重なるものと考えられる。

ところで福岡市近郊の農業地帯であったこの地域周辺も、最近の急激な都市開発の進展によって急速に宅地化しつつあり、豊かであった自然環境を大きく変貌させている。開発に伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査も相ついで行なわれ、歴史の皮肉な側面としてこの地域周辺の過去の歴史が次第に明らかにされつつあることも事実である。この地域の歴史環境については、これまで調査された遺跡の報告書に詳しく述べられているので多くはそれに譲ることにし、ここでは簡単にその特徴を記すことにする。

この地域周辺の先土器時代の資料については、これまで全く知られていなかったが、1976年7月のカルメル修道院内遺跡の発掘調査において尖頭器が出土し、初めてこの地域にも先土器時代の人間の足跡を認め得るようになった。

縄文時代については、油山北麓部の丘陵谷間などに土器や石器の散布地が認められる。押型文土器・石鏃などが採集された箱ノ池遺跡や柏原遺跡、曾畑式土器・石鏃など採集されている五ヶ村池遺跡、晩期の条痕文土器を出土した笹栗遺跡をはじめ数か所の遺跡が知られている。

4 周辺主要遺跡一覧表

Tab. 1 片江辻遺跡周辺主要遺跡一覧表

対照番号	遺跡名	時代	遺構・遺物	文献・備考
1	京の阪遺跡	古墳・平安	前方後方墳・粘土都鉄製品、経塚・銅製埴輪・陶磁器・銅鏡	①阪谷地所開発株式会社『京の阪遺跡』1976年
2	神松寺遺跡	弥生前期	甕棺群	②水野清一・島田直彦『北九州における壺棺調査報告』（人類学雑誌第43巻10・11号）1928年
3	神松寺古墳	古墳後期	円墳・横穴式石室	文献①所収
4	浄泉寺遺跡	弥生・古墳	住居跡・環穴群	③東洋開発株式会社『浄泉寺遺跡』1974年
5	カルメル修道院内遺跡	先土器 弥生前期	尖頭石器、甕棺 土壇墓 須石	文献①所収、銅剣副葬土壇墓は1976年7月に調査
6	片江西遺跡	弥生中期	甕棺	文献②所収
7	五ヶ村池遺跡	縄文前期	曾形式土器、石器	④福岡市教育委員会『福岡市埋蔵文化財遺跡地名表第1集』1969年
8	七隈古墳群	古墳後期	古墳群 8基	1969年第1次、1970年第2次調査。
9	大谷古墳群	古墳後期	20基以上の古墳群	⑤福岡市教育委員会『大谷古墳群 I』1972年
10	倉瀬戸古墳群	古墳後期	9基以上の古墳群	⑥倉瀬戸古墳群調査団『倉瀬戸古墳群』1973年
11	片江古墳群	古墳後期	6基以上の古墳群	⑦福岡市教育委員会『片江古墳群』1973年
12	早苗田古墳群	古墳後期	8基以上の古墳群	文献⑦所収
13	鳥越古墳群	古墳後期	5基以上の古墳群	文献⑦所収
14	小笹遺跡	弥生後期	石蓋土壇墓・鉄鍬 鉄杵遺構、土器群 石器・鉄器	⑧福岡市教育委員会『小笹遺跡発掘調査報告』1973年 ⑨福岡市教育委員会『小笹遺跡第2次発掘調査報告』1975年
15	宝台遺跡	弥生・古墳	住居跡・甕棺・祭祀	⑩日本住宅公社『宝台遺跡』1970年
16	丸隈台遺跡	弥生中期	甕棺・鉄刀・前漢鏡 3	文献⑩所収
17	飯塚遺跡	縄文・弥生 奈良	縄文晩期土器・石器 弥生土器、製鉄遺構	⑪福岡市土地開発公社『飯塚古代製鉄遺跡発掘報告書』1969年
18	瀬戸古墳群	古墳後期	9基以上の古墳群	⑫株式会社リコー『瀬戸古墳群』1975年
19	井手古墳群	古墳後期	4基以上の古墳群	⑬福岡市教育委員会『福岡市埋蔵文化財遺跡地名表第2集』1970年。1974年秋発掘調査、未刊。
20	大平寺古墳群	古墳後期	8基からなる古墳群	文献⑬
21	箱ノ池遺跡	縄文早・晩期	押型土器、石器	文献⑬
22	四十塚古墳群	古墳後期	25基以上の古墳群	文献⑬
23	大牟田古墳群	古墳後期	43基以上の古墳群	⑭福岡市教育委員会『大牟田15号・43号墳発掘調査報告』1971年



凡例

- × 先土器時代遺跡
- △ 縄文時代遺跡
- 弥生・住居跡
- ⊗ 弥生・墓棺
- ⊕ 箱式石棺・土埴墓
- ⊙ 古墳時代遺跡
- 古墳
- 歴史時代遺跡

Fig. 1 片江辻遺跡周辺遺跡分布図 (縮尺1/25,000)



Fig. 2 片江区域整理事业区域图 (縮尺 1/10,000)

しかしながら、その遺構については全く不明であり、今後の調査に待たなければならない。

弥生時代になると、この地域においても遺跡数は急激に増加し、人々の生活空間として積極的に利用されるようになったことを示すが、早良、福岡の両平野部とは異なり、前期初頭からの連続的發展を証明する遺跡はこれまで発見されておらず、今のところこの地域の弥生時代の幕明けは、前期も終末期以降からである。その後の發展過程は、宝台遺跡の集落構造、丸尾台遺跡の甕埴群と副葬品に見られるように、この地域も北部九州弥生時代中期社会の一般的形態を表現していると言える。後期についても遺跡の分布はさらに拡大すると考えられるが、古墳時代を高塚式古墳に象徴される社会とすると、その過渡的形態としての墳墓の発見はなく、わずかに浄泉寺遺跡の住居跡群、小笹遺跡の土埴墓群によって、この地域の後期段階を断片的に知り得る程度である。

これまで語られてきたこの地域周辺の古墳時代の特徴は、畿内型古墳の未伝播と、後期における群集墳の爆発的な増加という2点にあったと言える。しかしながら、京の環遺跡の発掘によって、この地域にも畿内型古墳の存在することが証明され、今後、その事実を踏まえて、この地域の古墳時代の構造的解明をなすべき問題が提起されたと言える。また群集墳については、急激な都市開発に伴い発掘調査例が増加しているところであり、次第に個別的な実態が明らかにされつつあるが、同時代の生産遺跡、集落遺跡などの解明と合せて、その実体を経済的基礎と政治的諸関係との関連において明らかにすべき段階にあると言える。

続く歴史時代の実態については、笹栗遺跡における奈良時代の製鉄遺構、京の環遺跡の平安末期経塚が発見されているだけで、多くは今後の調査研究に待たねばならない。

2 発掘調査の経過 (Fig.2)

昭和48年度の第1次発掘調査(片江古墳群)に至る分布調査の際、区画整理事業地区内には弥生時代、古墳時代の集落跡や水田跡などが包蔵されていることが指摘されていた。本年度はその結果と新たな知見のもとに、区画整理事業計画の進捗と合わせ、幹線道路新設計画地内の次の3地区を発掘調査の対象とすることになった。

- ① 天神地区……福岡市西区大字片江字天神1186番地
- ② 辻地区…… “ “ “ 字辻1095, 1096, 1097, 1101番地
- ③ 西地区…… “ “ “ 字西1316, 1318番地

天神地区は表面採集によって弥生式土器片、土師式土器片などが得られたところで、住居跡などの包蔵が予想され、辻地区は福岡市遺跡台帳 系551北片江遺跡の西南隣接地にあたり、古墳時代の住居跡などが包蔵されていると考えられた。また、西地区については、1928年、京都

8 発掘調査の経過

大学の水野清一・島田貞彦氏によって発掘された甕棺墓包蔵地に南側より対峙する地点で、分布調査においても甕棺の破片が採集され、弥生時代の甕棺墓包蔵地であることが予想された。

発掘調査は9月19日より開始し、まず最初に天神地区を着手した。天神地区は片江集落をのせる丘陵の中央部で、現況は畑作が行なわれ、最高地の標高は23.75mである。計画道路に合わせ、幅6m、長さ20mのトレンチを設定して表土削ぎを行なったが、厚さ20cmの耕作土の下はすぐ黄灰色粘土の地山となり、遺物包含層や遺構の掘り込みなど全く検出されなかった。この結果、天神地区は、かつて開墾や博多人形の陶土取りなどによって地山が削り取られ、遺跡はすでに破壊されていたことを確認した。

辻地区は天神地区の発掘と並行して9月19日から伐採作業を先行し、9月25日より発掘にかかった。まず、最も高位のⅠ区より開始し、続いてⅡ区を並行して行なった。Ⅰ区、Ⅱ区の調査を10月18日までに終了し、Ⅱ区で検出された棚状遺構がさらに北側にのびることが確認されたので、Ⅱ区の北側に1段落ちる畑地を新たにⅢ区として10月20日より発掘にかかった。そして、辻地区の全ての調査を12月4日に終了した。

西地区については、区画整理事業計画に問題が生じたところから、本年度は調査を実施できなくなり、来年度以降に持ち越すところとなった。



天神地区発掘調査風景（昭和50年9月）

第三章 調査の記録

1 遺跡の立地 (PL.2)

片江土地区副堂埋蔵物の対象地は、すでに記したごとく、片江川によって形成された沖積地が大部分を占めるが、その一部は堤より北にのびる丘陵の西側斜面をも含んでいる。この丘陵は西の片江川、東の一本松川によって開析されて独立丘陵のような観を呈している。片江集落のほとんどはこの丘陵上に営まれているが、宅地化の波は急激に沖積地にも進展しつつある。

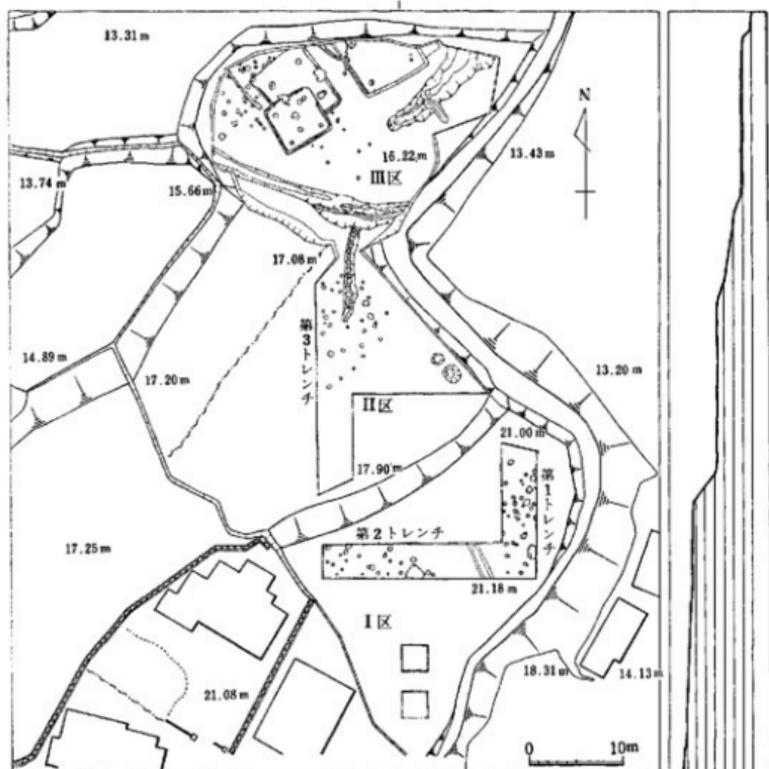
辻地区は、この丘陵の最北端部にあり、片江川と一本松川との合流地付近の狭少な沖積地に面しており、この沖積地を挟んで北の丘麓には、神松寺古墳、浄泉寺遺跡、カルメル修道院内遺跡などの遺跡が存在し、あたかもこれらの遺跡と対峙しているかのような位置関係にある。また昭和4年に友泉より油山に通じる県道油山線の拡幅工事の際、辻地区の東側斜面より合口墓棺が出上しており、さらには福岡市文化課が1970年度に実施した遺跡分布調査の際に、須恵器、土師器が表採され北片江遺跡として登録されていることなどから、遺跡存在の可能性は十分に考えられることであった。なお北片江遺跡という遺跡名は、もとよりその範囲を限定して登録されたものではなく、今回の発掘調査範囲はそれに重複するが、あえて片江辻遺跡と呼称し区別することにした。

2 調査区の設定 (Fig.3)

片江辻遺跡は、丘陵の突出部にあるために北側に向けて傾斜大きく、東側は県道油山線と宅地によって削り落され崖面をなしている。南側はわずかに標高を増しつつ片江集落へ繋がっている。北側斜面は、3m程の段差を持って階段状をなしており、現況が旧地形をとどめているとは考えられず、畑耕作時の整形など後世のある程度の人為的な結果によるものであろう。この最も高い段をⅠ区とし、低くなるごとにⅡ区、Ⅲ区と呼ぶことにし、全面に磁北に従って10m方眼のグリッドを組み、Ⅰ区より調査を開始することにした。

3 Ⅰ区の調査 (PL.3)

最も高い位置にあるⅠ区は、標高21m前後で、わずかに北に向けて傾斜するがほぼ平坦面を

Fig. 3 片江辻遺跡地形図(縮尺 $1/600$)

なしており、県道油山線拡幅工事の際、合口墓棺が出土したという位置に接しており、過去のこうした事実や、周辺遺跡の立地などから竊棺などの弥生時代遺構の存在は当然予想されたのである。このため東側崖面に接して南北に幅4m、長さ15mのトレンチを設定し、これを第1トレンチと呼んだ。第1トレンチでは、耕作土下15~20cm程度で地山が現われ、30数個の小ピットが全面にわたって検出された。これらの小ピットは、大きさ、深さなどに画一性、統一性は認められず、また出土物も小破片であり時期決定にも困難な数量であった。このために、第1トレンチの南端に接して西へ直角に20mの第2トレンチを設定し、明瞭な遺構の出現を期待した。第2トレンチでは、第1トレンチとは様相を異にし、地山が東に向かって傾斜しており耕作土下に数層の土層が堆積していた。Fig. 4は、第2トレンチ南壁の東西の土層図と西壁の

南北の土層図である。I 層は耕作土層で約15cmの厚さで水平な堆積をなしている。II 層は砂質黄褐色土層。III 層は第1トレンチと第2トレンチの接合付近で長さ4mにわたって検出した北西方向にのびる溝状遺構に堆積している砂層で、近世の染付白磁片が出土した。IV 層は茶褐色土層で約50cmの堆積をなす。V 層は暗茶褐色土層で堆積は薄い。VI 層は地山に掘りこまれたピット状遺構に堆積した土層で黒茶褐色を呈している。遺物は、青磁、陶器、須恵器、土師器などで、I 層よりVI 層までのすべての層より出土しており、局部的な区別はつけられない。むしろ第2トレンチ西端の低くなっている部分を平坦化したようであり、この推測は遺物の混在と近世陶磁器類の量の多さからも妥当性があるものと思われる。第2トレンチでも20数個の小ピットを検出した。これらはトレンチの西側に集中する傾向にあるが、第1トレンチの小ピット群と同じように、明確な遺構として把握できなかった。さらに第2トレンチの南側に3m×3mの小グリッドを2か所で発掘したが、第2トレンチのような土層の堆積もなく、小ピットも検出できなかった。これらのことから、当初の予想は裏切られ甕棺墓などの遺構の検出はできなかったが、地山面の傾斜が北西方向に低くなっており、むしろ低い位置にあるII 区、III 区ほど遺構残存の可能性は大きいものと考えられた。

出土遺物 (Fig. 4)

いずれも小破片で図化したのは須恵器の3点のみである。

須恵器 (S-1～3)

S-1 は坏蓋で天井部を欠く小片で復原口径16.0cm、口径部と天井部との間に2条の沈線がめぐる。S-2 は坏身で全形の1/4の破片である。復原口径13.4cmあり、底部の回転ヘラ削りは約1/4を占める。S-1・S-2とも口縁部は不明。S-3は甕の口辺部で丸みのある口縁外面下には、帯で波状文を描き、その下に2条の沈線がめぐらしている。

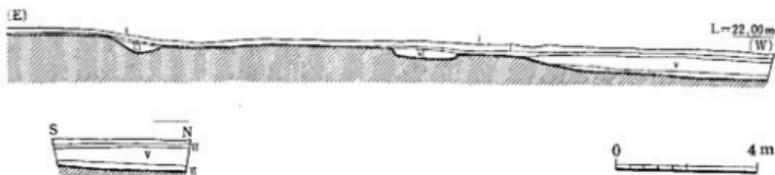
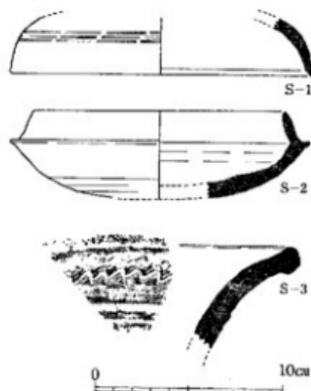


Fig. 4 I 区出土須恵器実測図 (縮尺1/4) と土層断面図 (縮尺1/400)

4 II区の調査 (PL.4)

II区もI区と同じように平坦な面をなすが、やや北西方向に傾斜している。トレンチは、この中央部に幅4m、長さ22mに南北にいれ、第3トレンチと呼称することにした。土層は、耕作土下はただちに花崗岩パイラン土の地山で、30数個の小ピットと南北方向の溝状の落ちこみの一端が現われた。このため小ピットの広がりや溝状遺構の北端を押えるために东北部に拡張したところ、東側崖面近くで直径約1.3mと直径約1.7mの円形の落ちこみが検出され墓塚と思われたのであるが、無遺物で墓塚と判断する有力な資料は、なんら得ることができず、その性格は不明と言わざるをえない。ただし、耕作土や小ピットの中には、小破片ではあるが弥生式土器、須恵器、土師器、青磁などが出土し、特に小ピットより磨製扁平片刃石斧の完形品が出土したこと、さらには、溝状遺構の北端がもう一段下のIII区までのびており、出土遺物の増加とともに標高が低くなるごとに次第に遺跡の中心に近づきつつあることを思わしめた。

出土遺構

II区で検出した小ピットは、I区の小ピットより深く、より良好な状況を示してはいるものの、かなり削平されているようで柱穴とは断定しがたい。ここでは、北にのびる溝状遺構のみについて記すことにする。

溝状遺構 (Fig. 5 PL.5)

第3トレンチで検出した溝状の落ちこみは、幅約1.2m前後、長さ約10mあり、II区とIII区との間にある崖面で終わっている。傾斜角は、

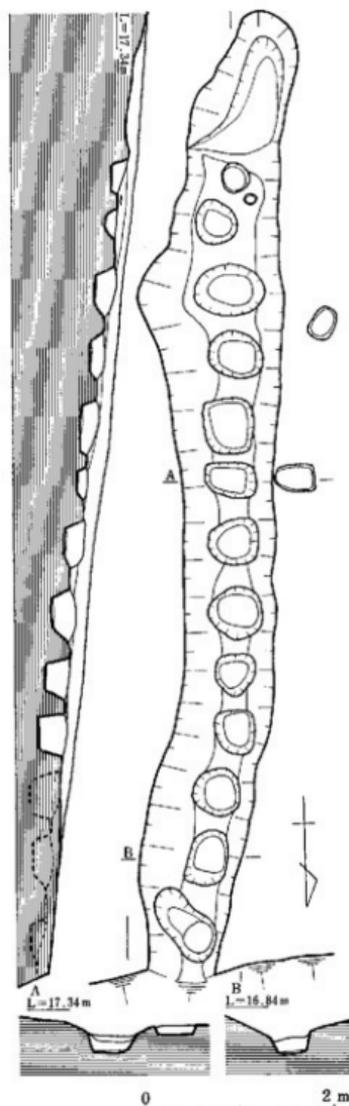


Fig. 5 溝状遺構実測図 (縮尺1/60)

約7度でほぼ等間隔に不整形のピットが掘られており13個を数える。ピットの大きさ、深さともに一定しないが、横断面で見れば、逆合形状の溝を掘った後、その溝底に円形のピットが掘られたものと思われる。現況は、やや階段状に近いが、上面が削平されていることを考慮して柵状遺構と推測された。遺物は、覆土より須恵器(S-4)が出した外は、時期を決定しうるような遺物は検出されなかった。調査期間の時間的制約からII区の拡張はできず、つぎにIII区の発掘調査に移動したために、柵状遺構という呼称の妥当性、さらには、どのような遺構に対しても構架であったのかは現状では断定できない。

出土遺物

石製品 (Fig. 6)

全長4.5cm、幅2.4cm、厚さ0.9cmの大きさで、一部に欠損が見られるが完形の磨製扁平片刃石斧である。基部を含む全面に研磨が施されており、刃部は先端より1cmの部分に約30度の角度をもって片面よりつけられている。図表面は平坦であるが刃部先端でやや上がりきみとなり尖った刃先をつくっている。扁平片刃石斧としてはきわめて小型の部類に入ろう。砂岩質の石材が用いられている。

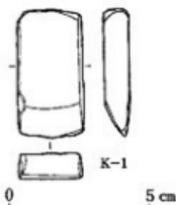


Fig. 6 II区出土石斧実測図 (縮尺 $\frac{1}{2}$)

須恵器 (Fig. 7)

S-4は坏蓋で全形の $\frac{1}{2}$ の破片で天井部を欠くが、ほぼ復原できる。口径は11.4cm、器高は3.4cm。天井部の回転ヘラ削りは $\frac{1}{2}$ 程を占め、その1単位の幅はせまく、天井頂部は平坦をなす。稜部は水平に突出し、やや開きぎみの口縁部が続く。口縁部内面には明瞭な段がある。胎土、焼成とも良好で、内外面とも青みをおびた黒灰色を呈す。ロクロの回転は逆時計まわりのようである。



Fig. 7 柵状遺構出土須恵器実測図 (縮尺 $\frac{1}{2}$)

5 III区の調査 (PL.6)

III区は、南区長丘から西区干隈に通じる幅15mの道路が建設される部分にあたり、またI区、II区の発掘調査知見から、標高約15m程で最も下段にあるIII区は、遺構の残存している可能性が大であり、II区で検出した柵状遺構の性格光明からも、II区とIII区との間にある崖面をも含む全面の発掘調査が必要となった。柵状遺構の北端については、先にも記したごとく崖面上で終わっており、その北端部とIII区崖面下とは、約1m程の比高差がある。

出土遺構

Ⅲ区検出の2条の溝状遺構と4軒の住居跡は、その検出順序から第1、2号溝、第1、2、3、4号住居跡と呼称した。

第1号溝 (Fig. 8)

第1号溝は、Ⅱ区とⅢ区との間の崖面下において、幅約1.5~2 m、長さ約22mにわたって検出したもので、その崖面にそってゆるやかに彎曲しながら東西にのびているが、Ⅱ区の欄状遺構の北端下付近が最も高く、東西に向かって次第に深さを増している。検出部における最深部は西側端であるが、溝上面との差は約30 cm程でかなり浅い。溝斜面の掘り込みも明瞭でなく、遺物も須臾器、土師器、陶磁器などの小破片が混存して出土しており、意図的に掘られた溝というよりも、むしろ崖面下のために雨水などによる自然的な結果の溝と考える方が妥当性があるのではなかろうか。

第1号溝出土遺物

出土遺物量はきわめて少量で、かつ小破片であったために図化しえたのは陶磁器6点のみであった。

磁器

J-1は、削り高台を持つ白磁碗である。

高台径5 cm、高台高6

cmあり、高台の削り出しは粗雑で、体部との境に小さな段がある。畳付は水平でなく高台縁は露胎である。軸は淡緑色をおびた灰白色を呈し見込内底は輪状に施釉されていない。J-2は、底部を欠いているために高台の有無は不明であるが、白磁の皿である。底部より大きく外に開きながら尖りぎみの口縁へと続くが、途中3か所で内側に屈曲する。軸は灰白色を呈し、底部は露胎でありこの部分には節目状文が認められる。体部、見込ともに文様は見られない。施釉された部分には貫入がある。口径は11.4 cm。J-3は青磁碗の底部で削り高台であるが欠損のため高台径、高さともに不明。軸は暗緑色を呈しかなり厚くかけられている。高台内は露胎で赤銅色を呈する。J-4は口辺部を残すのみで全形を知りえないが長胴の壺形をなすものと思われる。口辺部は折り返され、さらに内傾ぎみに直立する。軸は淡緑色で、胴部内面には施釉されない。口径4.8 cm。J-5は暗茶褐色胎土の陶器で体部上半を欠く。厚手の底部に内彎しながらのびる胴部がつく。軸は白黄色をおびた暗茶褐色を呈し、底部上面までかけられる。

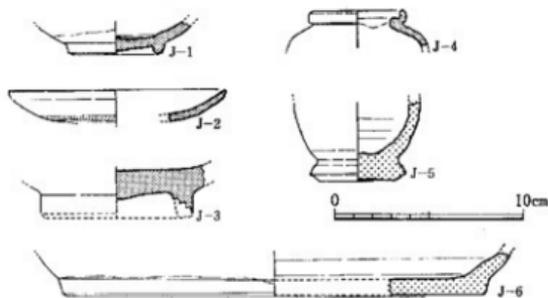


Fig. 8 第1号溝出土遺物実測図 (縮尺 $\frac{1}{4}$)

底部は回転糸切りの手法が見られる。底径4cm。J-6は復原底径23.4cmのかなり大きい底部でやや凹状をなす。底部端は鋭い面取りが行なわれている。釉は内面が黄緑色で細かな貫入が見られる。外面は黄黒色釉で底部は露胎である。胎土はJ-5と同じように陶土を用いているがより精良であり、焼成もよい。

第2号溝 (Fig.9 PL.7)

第2号溝は、Ⅲ区のはば中央部でその西南端を検出したもので、幅と深さを増しつつ、やや北へ彎曲しながら北東方向へのびている。この溝の延長部は、宅地造成ですでに削られているために北東方向への発掘は不可能であるが、発掘によって全長約12mを検出した。幅、深さともに最も大きい北東端部では、幅約5m、深さ約48cmを計る。溝に堆積している土層は次の5層に分けられる。Ⅰ層は黄褐色粘質細砂礫土。Ⅱ層は褐色粘質細砂礫土。Ⅲ層は黄褐色粘質土。Ⅳ層は褐色パイラン粘質土。Ⅴ層は黄褐色パイラン粘質土である。遺物はすべての層に包含されているが、Ⅰ層は近世の白磁片が出土しており、畑耕作による攪乱をかなり受けているようである。Ⅱ層よりⅤ層までは須恵器と土師式土器のみで大きな攪乱はないようであるが、出土遺物における時期差と層位とは明瞭に一致しない。第2号溝出土遺物には、第1号住居跡の覆土中より出土した高杯(S-28)と接合するものがあり、また住居跡に添って掘られ北に向かって彎曲するかのようであり、住居跡群をとり囲む周溝というような関連も考えられようが、残存部のみではそれを積極的に肯定する資料を欠いている。

第2号溝出土物

須恵器 (S-5, 6)

S-5は蓋のつまみ部の小破片である。つまみは、ほぼ水平な天井部に貼りつけてあり、その中央は凹状で左右へのほりは、あまり鋭くない。胎土は灰白色を呈しており砂粒の含有は少ない。内外面とも灰色を呈しており焼成は良好である。つまみの径は2.5cmである。J-6は高

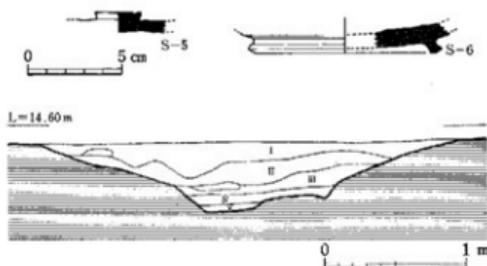


Fig.9 第2号溝出土須恵器実測図(縮尺 $\frac{1}{4}$)と第2号溝土層断面図(縮尺 $\frac{1}{40}$)

台付杯で体部のほとんどを欠いており、底部残存部も全形の $\frac{1}{4}$ にも満たない小破片である。復原径9.6cmを計る高台は、回転ヘラ削りした杯底部に貼りつけられており、その後回転横ナデを加え接合している。高台端はやや外に突出しているが、丸みをもっている。胎土、焼成とも良く、内面は淡灰色、外面は灰色を呈している。

住居跡

Ⅲ区の発掘で検出した住居跡は計4軒で、第1号から第4号までの名を付したが、番号は住居跡相互の時期差を示すのではなく、単に検出順序を示すにすぎない。これら4軒の間係は、第1号住居跡が第2号住居跡を切り、第4号住居跡が第3号住居跡を切っている。第2～4号住居跡はいずれも宅地造成によってその一部分を削られており、完全な姿をとどめるのは第1号住居跡のみであり、第3号住居跡にいたっては、わずかに壁のコーナーを残すにすぎない。以下各住居跡について記すが、壁の呼び方は Fig.10 のごとく、各住居跡の2つのコーナーが南北の位置にあることから北壁、南壁とはせず、北のコーナーより時計まわりでA、B、C、D壁と呼ぶことにする。また住居跡内のピットについてもこれに準じてP-1、2……とした。

第1号住居跡 (Fig.10 Tab.2 PL.8, 9)

Ⅲ区の現況は北西方向に傾斜しているために、南西側のB壁がもっとも保存状態がよく床面よりの高さは約45cm程ある。各壁の長さはコーナー間を計測したが表に示したごとくB壁がやや長い、ほぼ正方形プランの住居跡である。住居内には、5個のピットがあるが主柱穴と思われるのはP-1～P-4の4個で、各ピット間の長さも壁に比例しておりP-4からP-1間が最も長い。P-1～P-4の床面からの深さは、60cm～72cmであり差はない。P-5は深さが23cmと浅く柱穴とは考えがたい。かまどはD壁の中央につくられているが、土圧と耕作の為に著しく変形している。壁溝はB壁、C壁に見られ、A壁とD壁とは途中切れており全周しない。しかし、この部分が第2号住居跡の上にあたり、地山と同じ黄褐色土を薄く貼っているために明瞭さを欠いていたためであり、おそらく全周するのであろう。床面は、わずかながらD壁に向かって傾斜しており、第2号住居跡とは Fig.27 のごとく切り合っているが、重複した部分のみだけでなく、重複していない部分も同じような土を貼っているようである。住居内のほぼ中央の小見入火壇の石が炉のように置かれているが、床面より約20cm程高く、また焼土なども認められないことから、第1号住居跡に伴う遺構とは断定できない。

遺物は、須恵器、土師式土器、防錆草、砥石などであるが、これらのはほとんどは覆土中からの出土である。かまどからは、土師式土器は壺形土器(H-3)、鉢形土器(H-9)と甕(H-12)、須恵器は坏身(S-25)が置かれたような状態で出土した。床面からは、甕(H-11)、壺形土器(H-10)の土師式土器。坏蓋(S-10, 13)の須恵器。さらには壁溝からは、高坏形土器(H-7)、手捏ね土器(H-5)の土師式土器、小型短頸壺(S-38)の須恵器が出土しており、これらは第1号住居跡に伴う遺物と判断される。焼土がH-11の甕出土付近にわずかに見られるが、貯蔵穴や張出部などの施設は、住居跡の内外にも存在しない。

主柱穴と思われるP-1～P-4は、相対するコーナーを結ぶ対角線上に位置しており、ほぼ長さの等しい各壁や柱穴間の距離などは、きわめて数値的に計画構築されたことを思わせる。

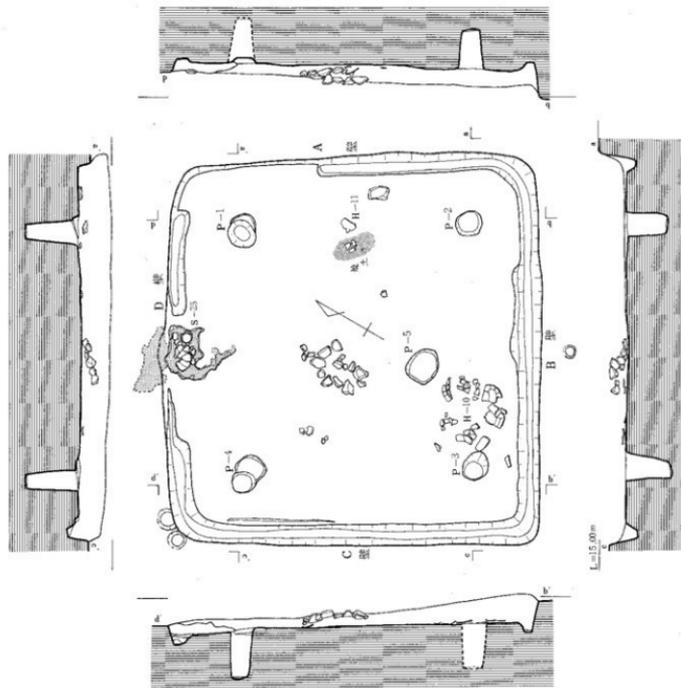


Fig.10 第1号住居跡実測図(縮尺1/4)

Tab.2 第1号住居跡計測値表

平面アウ ン	壁 A壁	B壁	C壁	D壁	土間 ピット敷	柱 P-1	P-2	P-3	P-4	P-5	P-6	土 層	出土 遺物	お か ま ど	柱 高	柱 間隔	柱 断面	柱 断面	柱 断面	
510	590	585	540		50×40:70	42×38:60	45×35:72	48×33:69	65×44:23			須 基 基 土 層 層 と 復 元 土 層 層 と	H-1 H-11 H-10	不明	15	45	75	不明	15	22.95㎡
460	500	475	500		柱間	350	375	350	P-4-P-1:380				~S-39 ~H-12 ~S-45 ~H-12	石						

(単位 cm)

第1号住居跡の出土遺物

須恵器 (Fig. 11~13 Tab. 3 PL. 10, 11)

第1号住居跡より出土した須恵器は、覆土中のも含めて坏蓋、坏身、高坏、甕、甍の各種があり、出土位置、法量、形態・手法の特徴、胎土、焼成などは Tab. 3 に示したごとくである。

坏蓋 (S-7~16)

図示した10点のうちS-8のみを除いては、ほとんどが復原実測であり口径などの法量にはやや正確さを欠くことは免れないが、形態、手法、胎土、焼成などの諸特徴からA類(S-7)、B類(S-8~13)、C類(S-14, 15)、D類(S-16)の4類に分類した。

A類は、S-7の1点のみであるが、平坦きみの天井部にほぼ直立する口縁部がつき、口縁端は、微妙に外に開き内面には段を持っており、特に稜部が小さく突出するなど、B類とは明らかに異なる特徴を持っている。B類は、天井部が丸みをおび、口縁部は長いが内傾しながら外に開く。口縁端内面の段は残っているが、稜部の突出する特徴は失なわれ、凹線(沈線)がめぐり天井部と口縁部の境をなす。C類は、B類の口径と大差ないが器高が低くなり扁平な器形をなす。天井部と口縁部との間の凹線はB類と同じであるが、鋭利さを欠く。口縁部は直立きみであるが、短く口縁端内面の段もにふい。D類は、S-16の1点のみである。天井頂部を欠くが、丸みを欠き山形をなすものと思われ、口縁部への移行も鈍角に屈曲して外に開き直線的にのびるなどA~C類とは大きくその器制を異にしている。

坏身 (S-17~27)

坏身は、坏蓋と対になって出土したものはない。坏身は坏蓋のように形態的には顕著な差はないが、立ちあがりの特徴などによってA類(S-17~20)とB類(S-21~27)に分類した。

A類は、丸みのある底部に水平な受部がつき、立ちあがりは直線的に内傾する特徴を持っているが、立ちあがりのみを見れば、直線的にのびるS-15・16と外傾きみにのびるS-17・18の2つに分けられる。B類は、底部の丸みがなくなる傾向にあり、受部は水平でなくやや上向きである。立ちあがりは、内傾するが直線的でなく外傾きみであり、立ちあがり上端で、さらに小さく外反し丸くおさめている。S-25は、かまどに置かれた状態で出土したもので、受部の特徴からB類としたが、立ちあがりを欠いているために断定できないが、丸みのある底部からすれば、むしろA類とすべきであろうか。

高坏 (S-28~35)

図化した高坏は8点であるが、完形品はなく全形を知りうるものはない。これらの高坏は形態の特徴によりA類(S-28)、B類(S-29)、C類(S-30~34)、D類(S-35)の4類に分けうる。

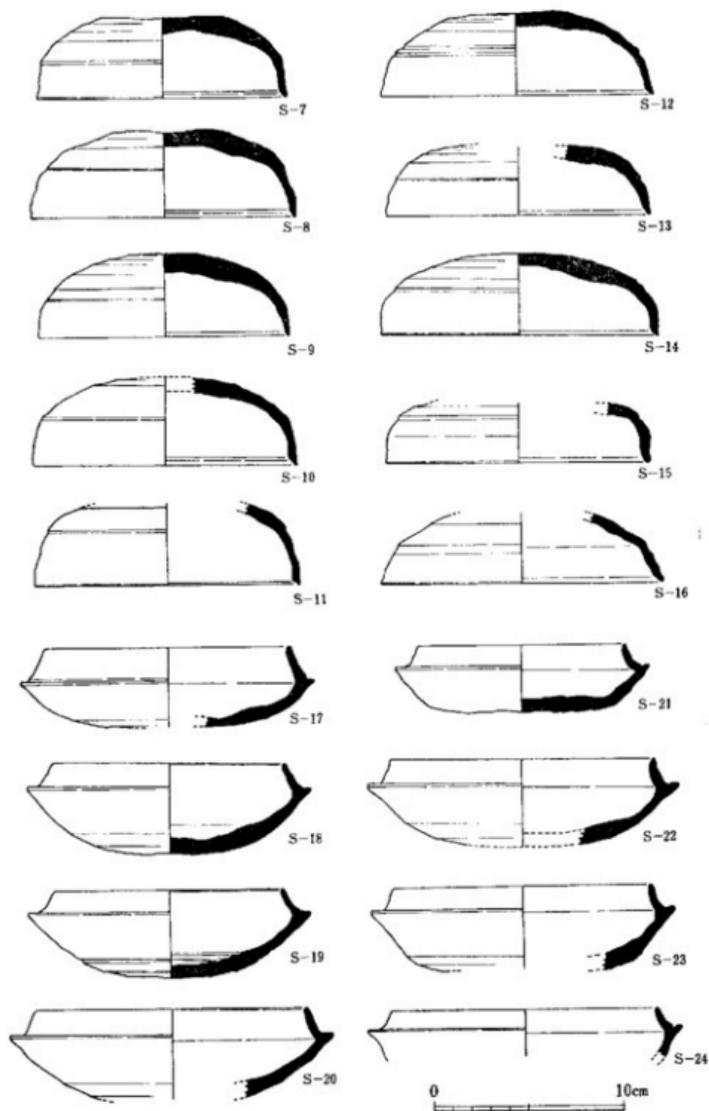


Fig. 11 第1号住居跡出土須恵器実測図(1) (縮尺1/2)

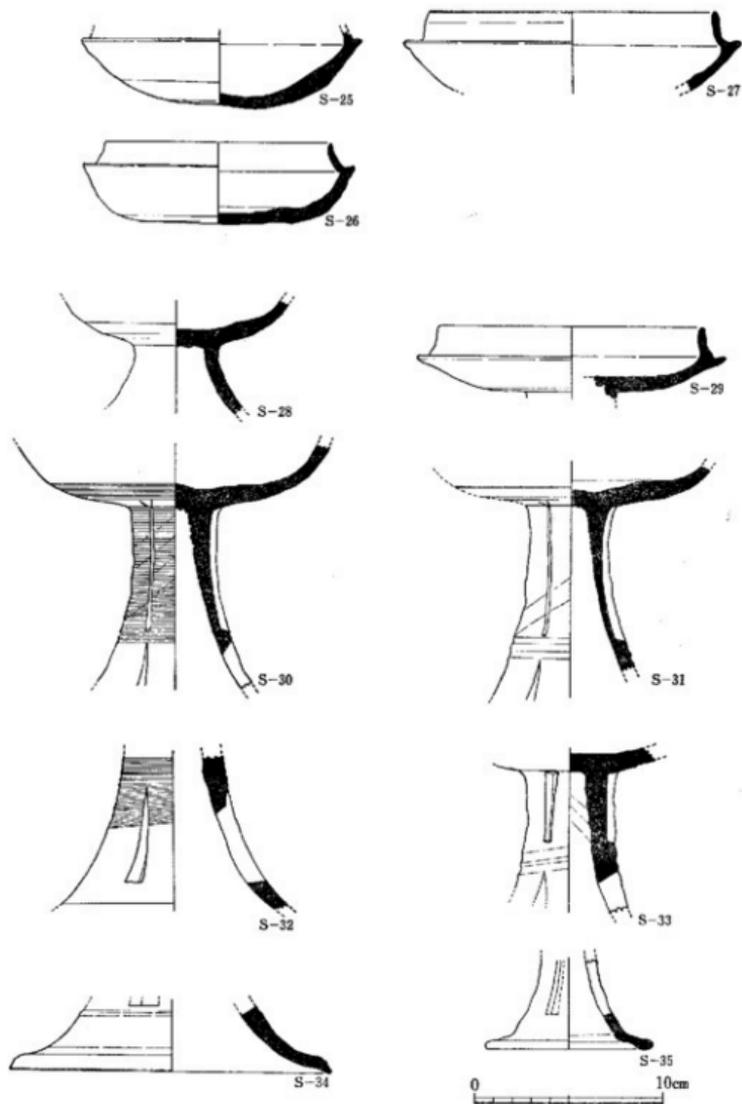


Fig. 12 第1号住居跡出土須恵器実測図(2) (縮尺半)

A類のS-28は、脚部が第2号溝からの出土である。脚部は、柱状をなさず坏部との接合部より裾部へ向けて大きく開いている。脚残存部には窓が開けられた形跡はない。坏部は上半分を欠いているために有蓋の高坏であるかは不明。**B類**のS-29は、坏部のみで脚部を欠くが、脚部との接合部より割れており、接合方法をよく知ることができる。坏部の受部、立ちあがり、坏身**B類**の特徴を持っているが、立ちあがりはより直立し、深さも浅いようである。**C類**は、S-30~34の5点で、有蓋高坏の可能性もあり**B類**と区別すべきでないかもしれないが、完形品でなく、**B類**の脚部が明らかでないことから**C類**として区別した。S-30~33の肩部は坏部接合部より、ゆるやかに外に開き裾部をつくるが、その中位程に2条の凹線があり、その上下3方に窓を持っている。上の窓は坏部接合後に入れられていることが坏部に傷があることから観察でき、すかし窓にはなっていない。下の窓は3角形ですかし窓となっている。手法的には、S-30、32には、脚柱状部にカキ目が見られ、S-31、33にはない。また上の窓は、S-30、31が長く、S-33は短い。これはS-33の脚柱状部が短く、低い脚高をなすからであろう。**D類**はS-35の1点で、すかし窓を3方に持ち裾端部は丸みを持っている。脚部の大きさからいって小型の無蓋高坏であろう。

壘 (S-36, 37)

S-36は、口縁部を欠く。頸部と球状部の下半にはカキ目を入れている。S-37は、頸部、口縁部ともに欠いている。球状部はS-36に比し肩がはり、凹線を入れて鋭い段をなしており、カキ目は施されないが、下半部はヘリ削りであり、肩部には斜行文を塗で入れている。いずれも球状残存部には孔が認められないが壘であろう。

壺 (S-38)

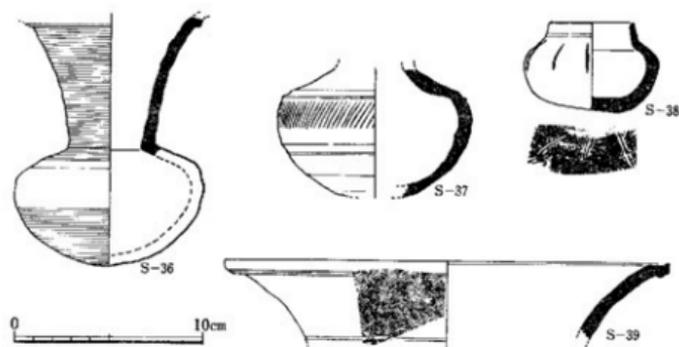
小型の壺で、**B壁**の壁溝より手掘ね土器(H-5)と並んで出土した。肩のはる胴部にやや内傾する直線的な短い頸部がつく。肩部には、ヘラ記号がつけられている。焼成時には蓋が被せられていたことが外面の色調よりうかがわれる。

甕 (S-39)

S-39は、朝顔状に大きく開いており、外面には櫛目波状文が施され、その下に沈線がめぐっている。この外にも接合復原できなかったが、多量の破片が出土しており、これらのほとんどは、内面に青海波叩き目文、外面に平行叩き目文が見られる。

土師式土器 (Fig.14 Tab.4 PL.11)

同化した土師式土器は12点で須恵器に比して稀強であるが、この数字が須恵器の出土量との比を示すものではない。確かに土師式土器の出土量は少ないが、磨滅しており接合復原が不可能で実測にたえるものが少なかったことが最大の原因であり、このことは、第2~4号住居跡にも共通して言えることであった。

Fig. 13 第1号住居跡出土須恵器実測図(3) (縮尺 $\frac{1}{4}$)**甍形土器 (H-1 ~ 3, 10)**

H-1は、やや弱のはる胴部に外反しながらのびる口辺部がつき、口縁端になってさらに小さく外反する。H-2も、同じような口径であるが胴部から口辺部への彎曲が大きくなる。H-3は、かまどより出土したもので、直立ぎみの口辺部をもつ。H-10は、口径32.2cmと大きく、胴部の接合復原できなかったが、内面に青海波叩き目文を残している。

手握ね土器 (H-4, 5)

H-4は、全体的に器壁厚いつくりで、口辺部を欠くが壺形をなすのであろうか。H-5は、碗形の土器で外面の整形は粗雑であるが、内面は口縁部を横ナデするなど丁寧な調整である。

高坏形土器 (H-7, 8)

いずれも坏部を欠き脚部の破片である。H-7とH-8は、同一個体ではなく接合しないが2つで脚部の形態が推察しうる。

鉢形土器 (H-9)

H-9は、かまどからの出土で37.4cmと大きい口径をなす。半球状の胴部にゆるやかに外彎し開く口辺部がつく。器形の大きさに対して器壁は薄いつくりをなす。

甕 (H-11, 12)

H-11は、口辺部と底部を欠き把手部が残る。把手は粘土の接合状況から見て挿入式のようなものである。H-12は、逆に把手部を欠く。H-11に比し器壁はかなり薄く、把手は挿入式接合によっていることが明瞭にうかがわれる。

用途不明土器 (H-6)

朝顔状の器形をなし漏斗状をなす。胎土、焼成などには他と特別に異なる点是指摘できない。

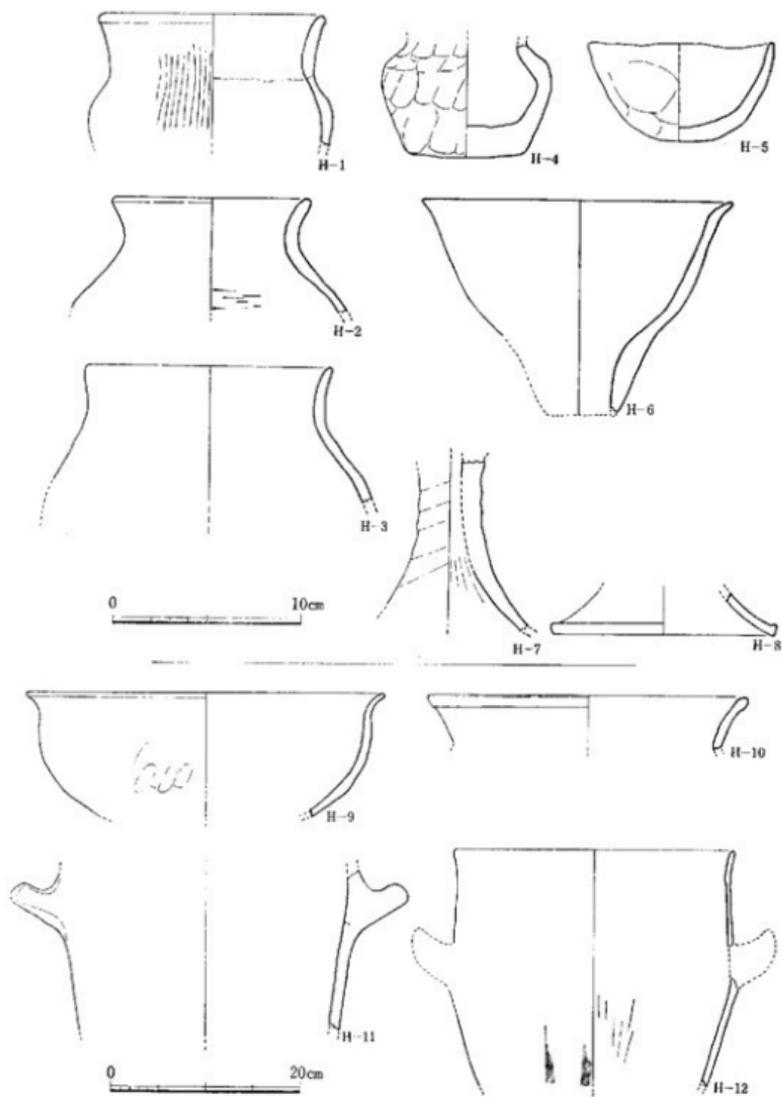


Fig. 14 第1号住居跡出土土器式土器実測図 (縮尺 $\frac{1}{4}$ ・ $\frac{1}{6}$)

Tab. 3 第1号住居跡出土須恵器一覽表

(単位は 単位は厘米)

No.	出土位置	器種	器(保存部)	状況	形器の特徴	手法の特徴	胎土地衣	色	裏	痕(印)	Fig.	PL.
S-7	覆土	土器	残存部は全部の瓦	口径 13.0 器高 4.3	残部はわずかに突出し、口縁部は真直でやや外反する。	残部は写像を撮影するが器部は残されぬ。口縁内面に白い痕を待つ。	黄	黄緑	内外面	灰色	同径	不明
S-8	覆土	土器	口縁部をやや突き出た瓦形	口径 14.0 器高 4.5	ごく浅い縁がめぐる天弁部と口縁部をのびる。天弁部は円状。	天弁部の調整法はS-5に類似するが口縁部内面はさらににぶくなる。	やや砂粒	黄緑	内外面	灰色	短時計同径	11
S-9	覆土	土器	全部の写を欠く	口径 12.2 器高 4.4	天弁部は丸くおび、口縁部との接合は浅く一箇となす。	口縁部内面にほわすか、一段の彫刻をとのめる。	やや砂粒	黄緑	内外面	灰褐色	短時計同径	11
S-10	床面	土器	全部の写を欠く	口径 14.0	残部はわずかに突出する。口縁部は真直、おびやかに外傾する。	天弁部の真直りは写像に施されるのみ。口縁部は丸くおびる。	黄	黄緑	内外面	灰色	同径	不明
S-11	覆土	土器	天弁部をやや突き出た瓦の残片	口径 14.2	残部にあたる部分には浅い縁がめぐる。最も浅い口縁部へと傾く。	口縁部には明瞭な縁はないが、真直を待つてあり、図状を呈する。	黄	黄緑	外面	灰褐色	同径	不明
S-12	覆土	土器	全部の写を欠く	口径 14.4 器高 4.4	天弁部と口縁部にあたる部分には浅い縁がめぐる。口縁部は外傾する。	真直り部は天弁部の写像をとのめる。天弁部内面にはアタ彫刻。	やや砂粒	黄緑	内外面	灰褐色	短時計同径	11
S-13	覆土	土器	残存部は全部の瓦	口径 14.0	残部はわずかに突出する。口縁部は真直、おびやかに外傾する。	天弁部の真直りは写像に施されるのみ。口縁部は丸くおびる。	黄	黄	内外面	灰褐色	短時計同径	11
S-14	覆土	土器	全部の写を欠く	口径 14.8 器高 4.4	口縁部内面は高さも低く扁平な形を呈する。	口縁部内面はかなり鋭角で縁部を待つ。	やや砂粒	黄緑	内外面	灰褐色	短時計同径	11
S-15	覆土	土器	天弁部を欠く残存部は瓦の残片	口径 13.8	口縁部と天弁部の境には、彫刻の浅直がめぐる。天弁部は平坦の。	口縁部の中央でやや縁を待つ。真直は丸くおびる。内面にわずかに縁を待つ。	黄	黄緑	内外面	黒褐色	同径	不明
S-16	覆土	土器	全部の瓦の破片で天弁部を欠く	口径 14.8	口縁部は天弁部と鈍角をなし、鋭角的にのびる。	天弁部の写像が撮影し、口縁部内面にわずかに縁を待つ。	黄	黄緑	内外面	黒褐色	同径	不明
S-17	覆土	土器	全部の写を欠く	口径 13.0	残部の天弁部はほぼ水平にのび、立ちあがりは真直的に内傾する。	残部の真直りは写像に施されるのみ。天弁部内面にアタ彫刻。	黄	黄	内外面	灰褐色	同径	不明
S-18	覆土	土器	全部の写を欠く残存部は瓦	口径 12.2 器高 4.8	S-17と形態はあまり見出しえない。	残部の真直りは写像をとのめる。立ちあがりはかなり真直的にのびる。	黄	不黄	内外面	白灰色	短時計同径	11
S-19	覆土	土器	全部の写を欠く	口径 11.8 器高 4.9	丸くおびる底部に扁平な突起がつく。立ちあがりは真直に内傾する。	底部内面には用き業が認められる。底部の真直りは写像をとのめる。	黄	不黄	内外面	白灰色	同径	不明
S-20	覆土	土器	全部の瓦の破片	口径 14.2	天弁部はほぼ水平で残部は丸く、立ちあがりはやや短い。	天弁部の真直りから縁を待つ。真直は丸くおびる。底部の真直りは写像をとのめる。	黄	黄緑	外部面	灰褐色	同径	不明
S-21	覆土	土器	全部の写を欠く	口径 11.0 器高 3.5	残部の天弁部は真直にのび、立ちあがりはやや大きい。	天弁部の真直りは写像をとのめる。この縁は真直にアタ彫刻による調整。	黄	黄緑	内外面	灰褐色	同径	不明
S-22	覆土	土器	全部の瓦の破片	口径 14.0	立ちあがり内傾するが器部で残す。	立ちあがり、天弁部とも縁のつくりをなす。	黄	黄緑	内外面	灰褐色	同径	不明
S-23	覆土	土器	立ちあがり部が残存	口径 13.4	天弁部は真直り部で大きく傾斜し平坦な底部をなすであろう。	内傾する立ちあがりの中位で真直に真直となる。	砂粒	黄緑	内外面	灰褐色	同径	不明
S-24	覆土	土器	立ちあがり部が残存	口径 14.0	立ちあがり内傾し、中央でやや上方に傾斜する。	立ちあがり天弁部との間に浅直がめぐる。	黄	黄緑	外部面	灰褐色	同径	不明
S-25	かまど	土器	立ちあがり部を欠く	口径 14.9	真直り部、天弁部は小さくその縁部は丸い。	真直り部で調整が認められるが、天弁部の真直りは写像に施される。	黄	不黄	内外面	白灰色	同径	不明
S-26	覆土	土器	全部の写を欠く	口径 12.0 器高 4.3	真直り部より扁平となり、ほぼ同じ厚さとなる。	立ちあがり内傾し、真直り部で調整が認められる。真直りに真直りあり。	砂粒	黄緑	内外面	灰褐色	短時計同径	11
S-27	覆土	土器	立ちあがり部が残存	口径 15.0	天弁部は丸くおび、中央でやや上方に傾斜する。	天弁部では真直りは認められぬ。	黄	黄緑	外部面	灰褐色	同径	不明
S-28	覆土	土器	高坪、残存部は全部を欠く	口径 4.6	残部は第2号講からの出土。彫刻は真直をとのめる。天弁部の真直り部は大きい。	天弁部の真直りは写像をとのめる。口縁部は真直に傾斜する。	砂粒	黄緑	内外面	灰褐色	短時計同径	11

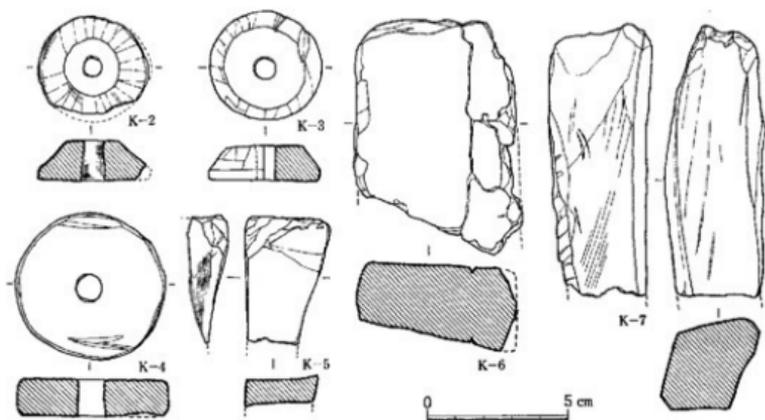
石製品 (Fig. 15 PL. 9)

紡錘車 (K-2~4)

紡錘車K-2~4は、いずれも覆土中からの出土ではあるがK-3はもっとも床面に近い部分から検出された。3点とも滑石製でK-3は、特に良質の滑石が用いられている。K-2は、截頭円錐形でわずかに一部分を欠く。下底面径3.8 cm, 上面径1.9 cm, 高さ1.5 cm, 中心の貫通孔径7 mm, 重さ25 gを計る。上下面はよく研磨されており、体部斜面には上下方向の幅3 mm程の削り痕が認められる。K-3も、同じように截頭円錐形である。下底面径3.9 cm, 上面径2.8 cm, 高さ1.3 cm, 孔径6 mm, 重さ30 gで、ほぼ大きさは同じであるが、薄いつくりをなしているため上面の径が大きくなっている。上下面は研磨されており、体部斜面には細かな削り痕が見られる。K-4は、円盤形で径5.2 cm, 厚さ1.3 cm, 孔径8 mm, 重さ68 gを計る。側面は細かな削りの後に研磨を加えており、上下面の研磨も丁寧である。

砥石 (K-5~7)

K-5とK-7は、粘板岩質の石材で、K-6は、砂岩質の石材が用いられている。K-5は、最大幅3 cm, 長さ4.5 cmあるが図裏面は欠失しており、砥石の小破片と言えよう。ただし両側面は研ぎ面となっていることからすれば小型の砥石と思われる。K-6は、最大幅5.7 cmで長さは欠損のため不明。図裏面は原形をとどめている。研ぎ面は図表面の1面のみである。K-7は、断面不整4角形で研ぎ面は2面に見られ、1面は自然面を残すがあと1面には、約5 mm幅の削り痕が残っている。K-5, 7は仕上げ、K-6は粗研ぎ用の砥石であろう。

Fig. 15 第1号位層跡出土石製品実视图 (縮尺 $\frac{1}{2}$)

第2号住居跡 (Fig. 16, 17 Tab. 5 PL. 12, 13)

第2号住居跡は、第1号住居跡より南西部の隅を切られており、またA壁とD壁とのコーナーも細の土手に入っているために各壁の計測値は正確でなく復原、推定値である。これによる第1号住居跡とは異なりA壁、C壁がB壁、D壁より長く、B壁よりD壁が長くなっているために、D壁に向って開きぎみの長方形の平面プランをなす。住居内には、6個のピットがあり、P-1, 2, 4, 5が主柱穴と考えられる。P-2とP-3の関係はP-2が新しく掘られている。P-1～5のピットは、径70cm前後の掘り方が認められ床面からの深さは約70cmであり差がないが、絶対標高からみればP-1, 5がP-2, 4より10cm以上も深く穿たれている。床面はD壁に向かってゆるやかに傾斜しており、B壁とD壁の床面の差は約24cmもある。このためD壁の立ちあがりは10cm足らずである。壁溝は、A～C壁にコの字形にめぐりD壁には見られない。これはD壁部の床面が後世の耕作などによって削平されたと考えられるよりも、当時より傾斜する床面であり、もともとD壁は壁溝を持っていなかった可能性がある。これは、D壁の床面はC壁の壁溝底レベルよりも約20cmも低く削平されたという假説にもなりうるが、壁溝の底部レベルはB壁が反も高くD壁に向って低くなっている。つまり壁溝の深さは、絶対レベルを等しくなるように掘られているのではなく床面の高さに支配されているので、もしD壁部に壁溝が掘られていたとすれば当然残っていなければならない。さらに主柱穴と考えたP-1, 2, 4, 5の掘られ方は、床面の低い側のP-1, 5も床面からの深さは同じであることから床面が傾斜していたという推測の一根據になりうる。したがって床面の差だけP-1, 5の底部レベルはP-2, 4よりも約10cm低い結果となったのであろう。

遺物の出土量は、第1号住居跡に比し須臾器、土師式土器ともに少なく、第2号住居跡に停うと考えられるものは、かまど付近から出土した遺物に限られよう。

かまどは、A壁の中央よりややB壁にかたよって作られており、かまどより破片ではあるが壺形土器(H-16)、甕(H-21)が出土しており、第1号住居跡より規模も大きく、はるかに残存状況はよい。かまどの製作は、壁溝を掘りめぐらした後に白色粘土で構築されていることが断面によって観察される。かまどの土層は、I層が粘土で表面は黄緑色を呈している。II層も同じ粘土であるが熱変化のためかなり赤色を増す。III層はV層と同一層とすべきであるがやや黒みをおび暗茶褐色となっている。IV層は黄茶褐色土でV層とともに土器片を含有している。V層は茶褐色でIII～V層までは、小ブロック状に赤色、黄色の粒子と灰が入っている。VI層は焼土、VII層は地山と同じ土が貼りつけられている。これらの各層は、ほとんどかなりの熱を受けたりしく変化はげしく本来は7層に細分されるべきものではなからうが、逆に製作方法をよく知ることができる。それによると、かまどを設置する位置の壁を煙出しの部分のみを斜めに削り落とし、焚き口から火床部を床面よりわずかに掘りこぼめるとともに、先に壁溝が

掘られているので地山と同じ土でこれを埋めて両袖も同じようにしてコの字形のおおよその形を作り、その上に白色粘土を貼り外形を整えているようである。ただ焚き口の上には粘土があり、また口辺部を下にして出土した甕形土器は、粘土で固定しているようであ

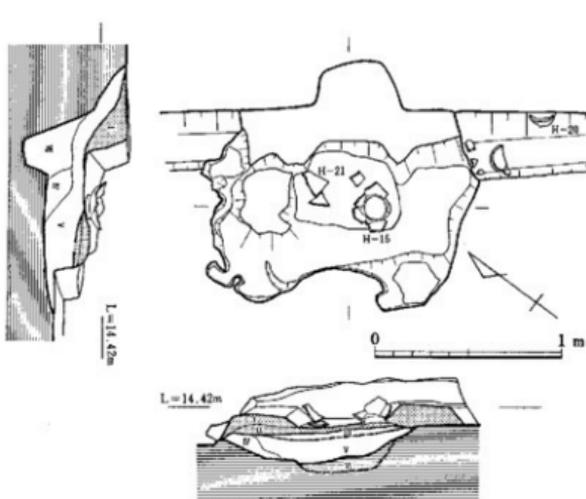


Fig.17 第2号住居跡かまど実測図(縮尺 $\frac{1}{6}$)

り、これらの粘土が上からの流れでなければかまどの外形はコの字形ではなく口の字形をなしていた可能性が強い。

第2号住居跡の出土遺物

須恵器 (Fig.18 Tab.6 PL.14)

坏蓋 (S-40~44)

S-40は、丸みのある天井部から、ほぼ同じ彎曲で口縁部へとつながるもので天井部と口縁部との間には凹線をめぐらしている。S-41, 43は、口縁部から天井部への彎曲は同じであるが、S-41は口縁がやや外に開く。口縁部はS-40が長く器高の半程を占めており、S-41, 43は短い。口縁端内面はS-40には明瞭な段があるが、S-41, 43の段は鋭さを欠く。S-42, 44は、直立ぎみの短い口縁部で、口縁端内面に段を持つ。これらを第1号住居跡出土の坏蓋の分類と同じ視点で分類すればS-40, 41, 43はB類に、S-42, 44はC類に相当しよう。

坏身 (S-45)

底部を欠き全形を知ることができないが、水平な受部に、直線的に内傾する立ちあがりがついており、受部とのなす角度は90度に近いことから、第1号住居跡出土の坏身A類に入ろう。

高坏 (S-46~49)

図化した高坏は、有蓋高坏の蓋と脚部部の4点である。S-46は、壁溝よりの出土で、天井部を欠くがつまみがつけられていたものであろう。稜部は、わずかに突出しているにすぎな

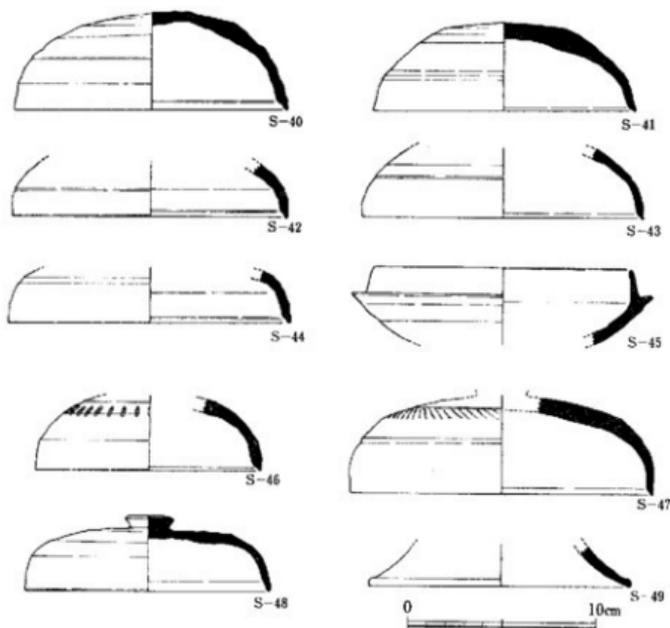


Fig. 18 第2号住居跡出土須恵器実測図(縮尺1/4)

い。S-47は、口径大きく稜部は突出せずに段を持っている。S-48は、完形で天井部につまみを持つ。口縁内面の段はその名残りを回転横ナデでとどめるのみである。S-49は、脚桶部で、裾端は丸みを持っている。残存部では窓の有無は判断できない。

土師式土器 (Fig.19 Tab.7 PL.14)

壘形土器 (H-13~16)

H-13は、肩のはらない胴部に端部で小さく外反する口辺部がつく。H-14は、球状の胴部に内傾する口辺部がつく。H-15, 16は、くの字形口辺を持つもので口縁端は丸くおさめる。

手握ね土器 (H-17, 18)

H-17, 18ともに平坦な底部で、器壁厚く内面は横に強く押してナデている。

高坏形土器 (H-19, 20)

H-19, 20ともに坏部中位で屈曲し外傾する口辺部をつくり、同じような形態をなす。

甔 (H-21)

H-11, 12に比し胴部に丸みがあり、口辺部は大きく彎曲して外に開く。

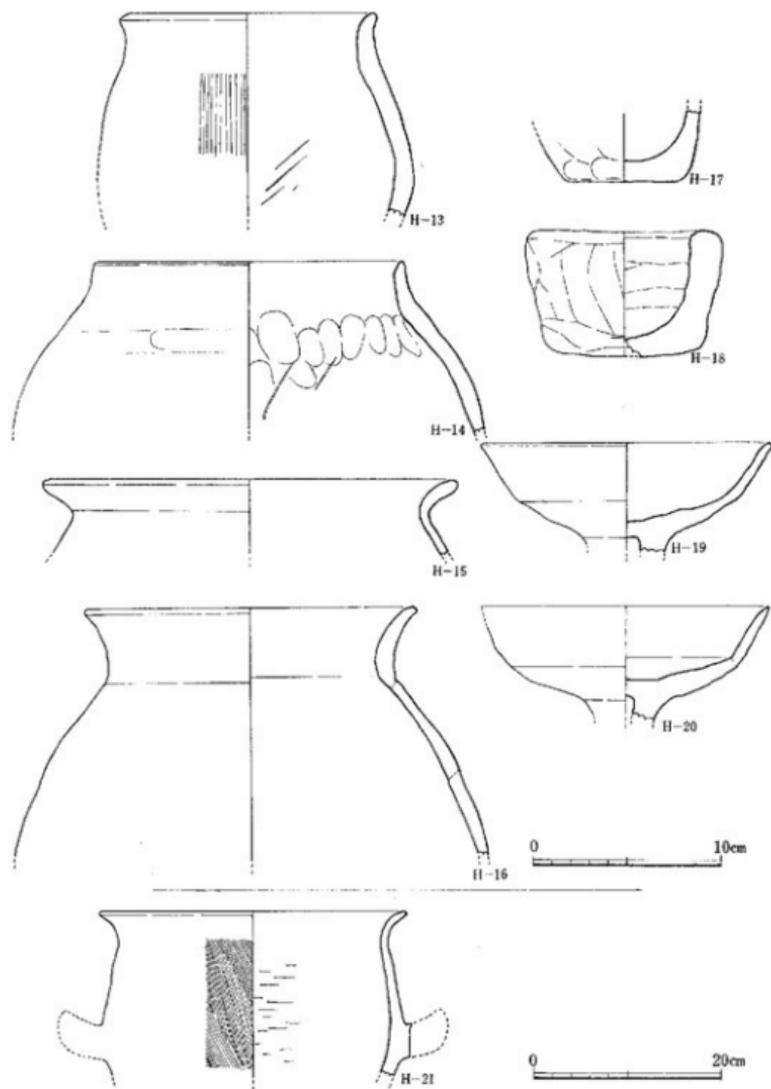


Fig. 19 第2号住居跡出土土師式土器実測図 (縮尺 $\frac{1}{4}$ ・1/4)

Tab. 6 第2号住居跡出土須恵器一覽表

(単位cm ※印は復原品)

No.	出土位置	器種	器底(残存部)	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色	陶質	備考	Fig.	PL
S-40	甕土	杯蓋	ほぼ完整	口径 14.5 器高 5.2	天弁部欠く。口縁で僅少する口縁部は反めである。	天弁部の裏面には写を占める。口縁部内面には明瞭な線を持つ。	良	普通	内外面 灰褐色	同転計 同転		18	14
S-41	甕土	杯蓋	全体の写を欠く	口径 14.0 器高 4.7	S-40に比し天弁部が平直で口縁部も無い。	天弁部の裏面には写程度。口縁部内面には無い。	砂粒	普通	内外面 灰褐色	同転計 不明		18	14
S-42	甕土	杯蓋	口縁部欠の破片	口径 14.2	口縁部短く、浅い浅縁が天弁部との境をなす。	口縁部は丸みを持つが短く、内面には明瞭な線縁がはいる。	良	普通	内外面 灰褐色	同転計 不明		18	14
S-43	柱穴	杯蓋	口縁部欠の破片	口径 15.0	口縁部と天弁部の境は浅く、口縁部は反めである。	天弁部の裏面には写以上を占める。口縁部内面には写を持つ。	良	普通	内外面 灰褐色	同転計 同転		18	14
S-44	甕土	杯蓋	口縁部欠の破片	口径 15.0	口縁部と天弁部の境は浅く、口縁部は反めである。口縁部は丸みを持つが短く、内面には明瞭な線縁がはいる。	口縁部は丸みをおおむね占める。口縁部内面には写を持つ。	良	普通	内外面 灰褐色	同転計 不明		18	14
S-45	甕土	杯蓋	口縁部欠の破片	口径 13.6	天弁部はほぼ水平で、天弁部は浅く、口縁部は反めである。	天弁部の裏面には写以上を占める。	良	普通	内外面 灰褐色	同転計 不明		18	14
S-46	甕土	杯蓋	口縁部欠の破片	口径 12.0	天弁部欠く。天弁部と口縁部の境は浅く、口縁部は反めである。	口縁部は丸みがあり、内面には明瞭な線縁がはいる。天弁部中央には写を持つ。	良	普通	内外面 灰褐色	同転計 不明		18	14
S-47	甕土	杯蓋	全体の写を欠く	口径 16.2	天弁部は丸みを持つが短く、内面には明瞭な線縁がはいる。	天弁部中央には写以上を占める。口縁部内面には写を持つ。	良	普通	内外面 灰褐色	同転計 同転		18	14
S-48	甕土	杯蓋	全体の写を欠く	口径 13.0	天弁部と口縁部の境は浅く、口縁部は反めである。	天弁部内面には写を持つ。	良	普通	内外面 灰褐色	同転計 不明		18	14
S-49	甕土	杯蓋	口縁部欠の破片	口径 14.0	天弁部は丸みを持つが短く、内面には明瞭な線縁がはいる。	天弁部内面には写を持つ。	良	普通	内外面 灰褐色	同転計 不明		18	14

Tab. 7 第2号住居跡出土土師式土器一覽表

(単位cm ※印は復原品)

No.	出土位置	器種	器底(残存部)	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色	陶質	備考	Fig.	PL
H-13	竈溝	壺	胴型下手と口縁部を欠く	口径 13.4	長筒の胴型に貫り込みの口縁がつく。口縁部はやや外反する。	口縁部内面には写を持つ。口縁部は丸みを持つが短く、内面には明瞭な線縁がはいる。	砂粒 多い	普通	内外面 灰褐色	同転計 不明		19	16
H-14	甕土	壺	全体の写を欠く	口径 16.0	口縁部は内傾し口縁部でやや外反する。胴部は浅く、口縁部は丸みを持つが短く、内面には明瞭な線縁がはいる。	口縁部は丸みを持つが短く、内面には明瞭な線縁がはいる。胴部は浅く、口縁部は丸みを持つが短く、内面には明瞭な線縁がはいる。	砂粒	普通	内外面 灰褐色	同転計 不明		19	16
H-15	甕土	壺	口縁部欠の破片	口径 21.4	「く」の字形に外反する口縁部で口縁部は丸みを持つ。	口縁部は丸みを持つが短く、内面には明瞭な線縁がはいる。	良	普通	内外面 灰褐色	同転計 不明		19	16
H-16	かまど	壺	胴型下手と口縁部を欠く	口径 17.4	球状の胴型に「く」の字形に外反する口縁部がつく。口縁部は丸みを持つ。	口縁部は丸みを持つが短く、内面には明瞭な線縁がはいる。	砂粒	普通	内外面 灰褐色	同転計 不明		19	14
H-17	甕土	土師壺	底部のみで口縁部を欠く	口径 5.7	底部は平直をとり、内傾する口縁部は丸みを持つが短く、内面には明瞭な線縁がはいる。	内面は下向きに傾き、外面は丸みを持つが短く、内面には明瞭な線縁がはいる。	良	普通	内外面 灰褐色	同転計 不明		19	16
H-18	甕土	土師壺	全体の写を欠く	口径 8.0 器高 6.6	平直の底部から外反する口縁部がつく。口縁部は丸みを持つが短く、内面には明瞭な線縁がはいる。	内面は平直する様子を占める。口縁部は丸みを持つが短く、内面には明瞭な線縁がはいる。	砂粒	普通	内外面 灰褐色	同転計 不明		19	16
H-19	甕土	高杯	口縁部欠の破片	口径 15.4	口縁部は丸みを持つが短く、内面には明瞭な線縁がはいる。	口縁部は丸みを持つが短く、内面には明瞭な線縁がはいる。	良	普通	内外面 灰褐色	同転計 不明		19	16
H-20	甕土	高杯	口縁部欠の破片	口径 15.3	H-19に比し口縁部が丸みを持つが短く、内面には明瞭な線縁がはいる。	口縁部は丸みを持つが短く、内面には明瞭な線縁がはいる。	良	普通	内外面 灰褐色	同転計 不明		19	14
H-21	かまど	壺	口縁部欠の破片	口径 32.4	口縁部は丸みを持つが短く、内面には明瞭な線縁がはいる。	口縁部は丸みを持つが短く、内面には明瞭な線縁がはいる。	砂粒	普通	内外面 灰褐色	同転計 不明		19	16

第3号住居跡 (Fig. 21 PL. 15)

第3号住居跡は、第4号住居跡によって切られ、大部分が宅地造成によって削り落とされているために、わずかにC壁の一部を残しているにすぎない。第1、2、4号住居跡が重複しながらも壁の方向をほぼ同じくしているのに比べると第3号住居跡のみが異なる方位を持っており、C壁の延長部は第2号住居跡のA壁延長部と約60cmの間しかなく、第2号住居跡と同時に営まれていたかについては考慮する必要がある。住居内にピット1個が検出されたが、壁溝の中であり支柱穴とは考えがたい。壁溝は、検出部で見るとおいてはB壁とC壁に掘られており、ここより完形で埴形土器2個が出土した。

第3号住居跡出土土器 (Fig. 20 Tab. 8, 9)

須恵器 (S-50, 51) 坏身

S-50, 51は同じような器形をなし、第1号住居跡のB類に類似している。

土師式土器 (H-22, 23) 埴形土器

H-22, 23ともに丁寧な調整が施されており、小さい外反する口縁を持っている。

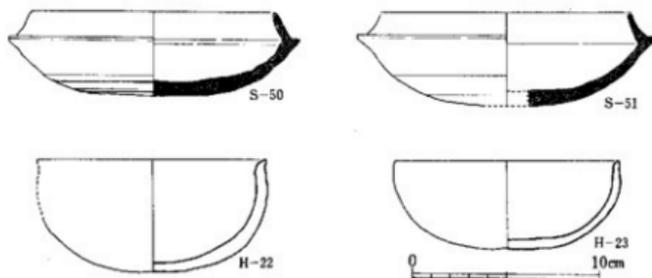


Fig. 20 第3号住居跡出土須恵器、土師式土器実測図 (縮尺1/4)

Tab. 8 第3号住居跡出土須恵器一覽表

(単位cm ※印は復原値)

No.	出土位置	器種	器形部 (残存部)	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	調査者 (中心)	Fig.	PL.
S-50	壁溝	14号	全形の耳を残す	口径 12.8 器高 4.7	立ちあがりはあまり弯曲することなく内傾する。	底部の裏面には写付を占め受部には丸みを持っている。	良	普通	内外面 肌色	藤野洋 田代	20	15
S-51	壁溝	14号	全形の耳を残す	口径 13.0 器高 5.0	立ちあがりのほどとんどを欠くが、口縁と頸部は直線的である。	底部内面に写付がナゲにすぎない調整であるが、その範囲が広い。	良	普通	内外面 肌色	藤野洋 田代	20	

Tab. 9 第3号住居跡出土土師式土器一覽表

(単位cm ※印は復原値)

No.	出土位置	器種	器形部 (残存部)	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	調査者 (中心)	Fig.	PL.
H-22	壁溝	埴	わずかに口辺部を欠く	口径 12.2 器高 6.0	半建形法の胴部に小さく外反する口縁が付き、その幅部はやや大きめである。	内面丁寧なナゲ。口縁外面はナゲ。	良	普通	内外面 赤褐色 底面 黒褐色		20	15
H-23	壁溝	埴	完形	口径 5.9 器高 4.8	H-22より器高低く、口縁の外反も小さい。	口縁はナゲ。全体的に丁寧な調整が施されている。	良	普通	内外面 赤褐色		20	15

第4号住居跡 (Fig. 21 Tab. 10 PL. 16)

第4号住居跡は、全体の経程を宅地造成によって削り落とされD壁は完全にはないが、残存部によってかろうじて全形を復原しうる。B、D壁がA、C壁より約1m程長い長方形の平面プランを有している。住居内には4個のピットがあり、P-2~4が主柱穴と考えられ、床面からの深さは約84cm前後で4軒の住居跡のうちでは最も深く掘られている。柱間の距離P-2~3とP-3~4とでは10cmの差しかなく、壁の長さには比例していない。同じようなことは、第2号住居跡についても言及でき、正方形に近い平面プランの第1号住居跡よりも、柱の位置関係はより方形に近いことを指摘しうる。さらに第2号住居跡と比較すると、外形はほぼ同じ大きさであるが、柱間の距離は長く、第2号住居跡の壁長と柱間の距離との比よりも大きい。つまり壁に接近して柱穴が位置していることを意味している。壁溝は、A~C壁にみられ、D壁に向かって深さを増している。床面の高さも壁溝に比例しており第2号住居跡と同じように当初から床面は水平でなく、D壁部に向かって傾斜していたことが断定でき、このことは、第2号住居跡より床面の高い第3号住居跡が残存していることから納得できるであろう。

検出部には、かまどは見られなかったがA壁部にはわずかではあるが築土が認められた。またA壁に接して、長さ約1.9m(幅は不明)、住居床面より約45cm高い張出部があり、ここから須恵器(S-68)が出土している。

第4号住居跡の出土遺物

遺物は、須恵器、土師土器、鉄製品で、紡錘車などの石製品の出土はなかった。接合復原し図化できたものの多くは、床面と壁溝より検出されたもので、床面中央部に散存したような状況ではなかった。なおD壁は宅地造成によってすでに存在しないが、その崖面には張出部から第3号住居跡までの落ちこみが認められ、H-28はこの崖面からの出土である。

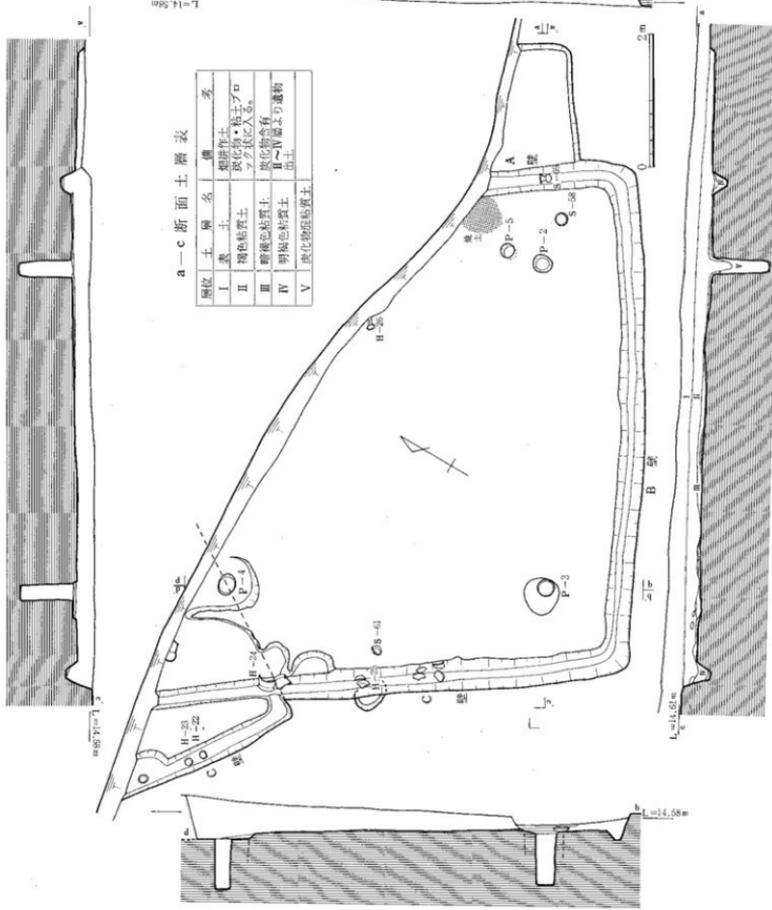
須恵器 (S-52~69) (Fig. 22, 23 Tab. 11 PL. 17)

坏壺 (S-52~54)

S-52は、稜部突出し、口縁部はほぼ垂直に立っている。口縁端面の段はにぶく丸みを持つ。S-53は、稜部突出せず沈線がめぐり、口縁部も湾曲ぎみになるがあまり外に開かずS-51の特徴を残している。S-54は、口縁部は開き、口縁端部でさらに小さく開く。これらは第1号住居跡出土の坏壺分類に対応させると、S-52, 53がA類、S-54がB類になる。

坏身 (S-55~60)

S-55は、水平にのびる受部に、内傾する直線的な立ちあがりがつく。S-56は、立ちあがり直線的ではあるがやや湾曲しているために受部との角度は小さくなる。S-57は、上向き受部を外構する立ちあがりながのびており、受部端、立ちあがり端は尖りぎみである。S-58は、同じような立ちあがりを持つ。底部はかなり変形しており焼成時に受けたものであろう。



a-c断面土層表

階位	土層名	備考
I	黒土	畑耕作土
II	腐植粘質土	炭化物・粘土プロック状に入る
III	腐植粘質土	炭化物含有
IV	新褐色粘質土	II~IV層より選物
V	炭化物粘質土	粘土

Fig.21 第 3, 4 号住居跡実測図 (縮尺 1/50)

Tab.10 第 4 号住居跡計測値表

東照フラシ	階	A	B	C	D	表						柱間	柱間	4	P-1	P-2	P-3	P-4	P-5	P-6	P-7	P-8	P-9	P-10	P-11	P-12	P-13	P-14	P-15	P-16	P-17	P-18	P-19	P-20	P-21	P-22	P-23	P-24	P-25	P-26	P-27	P-28	P-29	P-30	P-31	P-32	P-33	P-34	P-35	P-36	P-37	P-38	P-39	P-40	P-41	P-42	P-43	P-44	P-45	P-46	P-47	P-48	P-49	P-50	P-51	P-52	P-53	P-54	P-55	P-56	P-57	P-58	P-59	P-60	P-61	P-62	P-63	P-64	P-65	P-66	P-67	P-68	P-69	P-70	P-71	P-72	P-73	P-74	P-75	P-76	P-77	P-78	P-79	P-80	P-81	P-82	P-83	P-84	P-85	P-86	P-87	P-88	P-89	P-90	P-91	P-92	P-93	P-94	P-95	P-96	P-97	P-98	P-99	P-100	P-101	P-102	P-103	P-104	P-105	P-106	P-107	P-108	P-109	P-110	P-111	P-112	P-113	P-114	P-115	P-116	P-117	P-118	P-119	P-120	P-121	P-122	P-123	P-124	P-125	P-126	P-127	P-128	P-129	P-130	P-131	P-132	P-133	P-134	P-135	P-136	P-137	P-138	P-139	P-140	P-141	P-142	P-143	P-144	P-145	P-146	P-147	P-148	P-149	P-150	P-151	P-152	P-153	P-154	P-155	P-156	P-157	P-158	P-159	P-160	P-161	P-162	P-163	P-164	P-165	P-166	P-167	P-168	P-169	P-170	P-171	P-172	P-173	P-174	P-175	P-176	P-177	P-178	P-179	P-180	P-181	P-182	P-183	P-184	P-185	P-186	P-187	P-188	P-189	P-190	P-191	P-192	P-193	P-194	P-195	P-196	P-197	P-198	P-199	P-200	P-201	P-202	P-203	P-204	P-205	P-206	P-207	P-208	P-209	P-210	P-211	P-212	P-213	P-214	P-215	P-216	P-217	P-218	P-219	P-220	P-221	P-222	P-223	P-224	P-225	P-226	P-227	P-228	P-229	P-230	P-231	P-232	P-233	P-234	P-235	P-236	P-237	P-238	P-239	P-240	P-241	P-242	P-243	P-244	P-245	P-246	P-247	P-248	P-249	P-250	P-251	P-252	P-253	P-254	P-255	P-256	P-257	P-258	P-259	P-260	P-261	P-262	P-263	P-264	P-265	P-266	P-267	P-268	P-269	P-270	P-271	P-272	P-273	P-274	P-275	P-276	P-277	P-278	P-279	P-280	P-281	P-282	P-283	P-284	P-285	P-286	P-287	P-288	P-289	P-290	P-291	P-292	P-293	P-294	P-295	P-296	P-297	P-298	P-299	P-300	P-301	P-302	P-303	P-304	P-305	P-306	P-307	P-308	P-309	P-310	P-311	P-312	P-313	P-314	P-315	P-316	P-317	P-318	P-319	P-320	P-321	P-322	P-323	P-324	P-325	P-326	P-327	P-328	P-329	P-330	P-331	P-332	P-333	P-334	P-335	P-336	P-337	P-338	P-339	P-340	P-341	P-342	P-343	P-344	P-345	P-346	P-347	P-348	P-349	P-350	P-351	P-352	P-353	P-354	P-355	P-356	P-357	P-358	P-359	P-360	P-361	P-362	P-363	P-364	P-365	P-366	P-367	P-368	P-369	P-370	P-371	P-372	P-373	P-374	P-375	P-376	P-377	P-378	P-379	P-380	P-381	P-382	P-383	P-384	P-385	P-386	P-387	P-388	P-389	P-390	P-391	P-392	P-393	P-394	P-395	P-396	P-397	P-398	P-399	P-400	P-401	P-402	P-403	P-404	P-405	P-406	P-407	P-408	P-409	P-410	P-411	P-412	P-413	P-414	P-415	P-416	P-417	P-418	P-419	P-420	P-421	P-422	P-423	P-424	P-425	P-426	P-427	P-428	P-429	P-430	P-431	P-432	P-433	P-434	P-435	P-436	P-437	P-438	P-439	P-440	P-441	P-442	P-443	P-444	P-445	P-446	P-447	P-448	P-449	P-450	P-451	P-452	P-453	P-454	P-455	P-456	P-457	P-458	P-459	P-460	P-461	P-462	P-463	P-464	P-465	P-466	P-467	P-468	P-469	P-470	P-471	P-472	P-473	P-474	P-475	P-476	P-477	P-478	P-479	P-480	P-481	P-482	P-483	P-484	P-485	P-486	P-487	P-488	P-489	P-490	P-491	P-492	P-493	P-494	P-495	P-496	P-497	P-498	P-499	P-500	P-501	P-502	P-503	P-504	P-505	P-506	P-507	P-508	P-509	P-510	P-511	P-512	P-513	P-514	P-515	P-516	P-517	P-518	P-519	P-520	P-521	P-522	P-523	P-524	P-525	P-526	P-527	P-528	P-529	P-530	P-531	P-532	P-533	P-534	P-535	P-536	P-537	P-538	P-539	P-540	P-541	P-542	P-543	P-544	P-545	P-546	P-547	P-548	P-549	P-550	P-551	P-552	P-553	P-554	P-555	P-556	P-557	P-558	P-559	P-560	P-561	P-562	P-563	P-564	P-565	P-566	P-567	P-568	P-569	P-570	P-571	P-572	P-573	P-574	P-575	P-576	P-577	P-578	P-579	P-580	P-581	P-582	P-583	P-584	P-585	P-586	P-587	P-588	P-589	P-590	P-591	P-592	P-593	P-594	P-595	P-596	P-597	P-598	P-599	P-600	P-601	P-602	P-603	P-604	P-605	P-606	P-607	P-608	P-609	P-610	P-611	P-612	P-613	P-614	P-615	P-616	P-617	P-618	P-619	P-620	P-621	P-622	P-623	P-624	P-625	P-626	P-627	P-628	P-629	P-630	P-631	P-632	P-633	P-634	P-635	P-636	P-637	P-638	P-639	P-640	P-641	P-642	P-643	P-644	P-645	P-646	P-647	P-648	P-649	P-650	P-651	P-652	P-653	P-654	P-655	P-656	P-657	P-658	P-659	P-660	P-661	P-662	P-663	P-664	P-665	P-666	P-667	P-668	P-669	P-670	P-671	P-672	P-673	P-674	P-675	P-676	P-677	P-678	P-679	P-680	P-681	P-682	P-683	P-684	P-685	P-686	P-687	P-688	P-689	P-690	P-691	P-692	P-693	P-694	P-695	P-696	P-697	P-698	P-699	P-700	P-701	P-702	P-703	P-704	P-705	P-706	P-707	P-708	P-709	P-710	P-711	P-712	P-713	P-714	P-715	P-716	P-717	P-718	P-719	P-720	P-721	P-722	P-723	P-724	P-725	P-726	P-727	P-728	P-729	P-730	P-731	P-732	P-733	P-734	P-735	P-736	P-737	P-738	P-739	P-740	P-741	P-742	P-743	P-744	P-745	P-746	P-747	P-748	P-749	P-750	P-751	P-752	P-753	P-754	P-755	P-756	P-757	P-758	P-759	P-760	P-761	P-762	P-763	P-764	P-765	P-766	P-767	P-768	P-769	P-770	P-771	P-772	P-773	P-774	P-775	P-776	P-777	P-778	P-779	P-780	P-781	P-782	P-783	P-784	P-785	P-786	P-787	P-788	P-789	P-790	P-791	P-792	P-793	P-794	P-795	P-796	P-797	P-798	P-799	P-800	P-801	P-802	P-803	P-804	P-805	P-806	P-807	P-808	P-809	P-810	P-811	P-812	P-813	P-814	P-815	P-816	P-817	P-818	P-819	P-820	P-821	P-822	P-823	P-824	P-825	P-826	P-827	P-828	P-829	P-830	P-831	P-832	P-833	P-834	P-835	P-836	P-837	P-838	P-839	P-840	P-841	P-842
-------	---	---	---	---	---	---	--	--	--	--	--	----	----	---	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

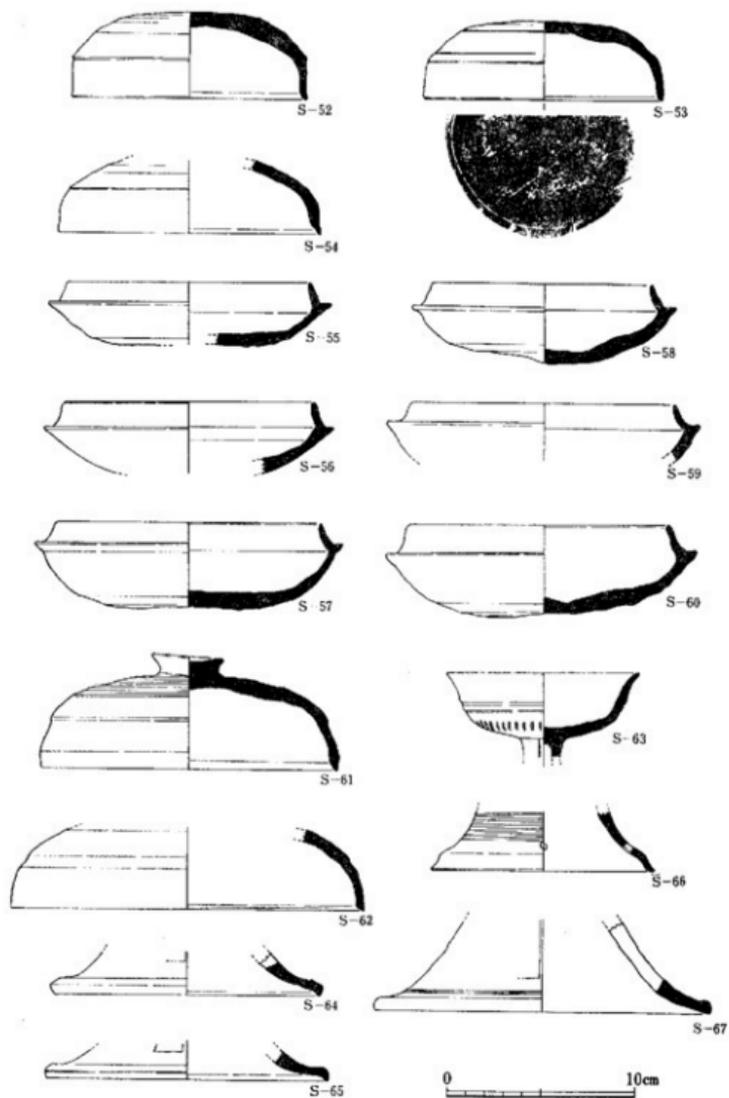


Fig. 22 第4号住居跡出土須恵器尖測図(1) (縮尺 $\frac{1}{2}$)

S-59は、立ちあがりの彎曲さらに大きくなり、受部も上向く。S-60は、厚めの受部から外彎さみの長い立ちあがりがつくが、立ちあがり端部では微妙に内彎し丸くおさめるといふ特徴を持っている。坏蓋と同じように第1号住居跡出土の坏身分類に対照させれば、S-55、56はA類に、S-57~60はB類にならう。

高坏 (S61~67)

S-61、62は、有蓋高坏の蓋で、S-61は床面より出土した。S-61の天井部つまみは、中央部が凹み左右へのりは大きくない。稜部の突出はないが、回転横ナデの際に意識的に強く押えて段を作りだしている。S-60は、口径大きく、口縁内面は回転横ナデで外傾する口縁をなす。稜部はS-61と同じような手法で段をつけている。S-63は、坏部のみである。口縁は彎曲しながら開き、坏部中位に2条の凹線がめぐり、わずかに残った脚部には3方に上下の傷が認められることから、脚部は窓を持っていた可能性がある。S-64~67は、脚部部である。S-64、65は、裾端部にやや違いはあるが形態的には類似しており3方にすかし窓を持っている。S-66は、やや特異な形態をなしており、朝顔状にそのまま開かず裾部で屈曲しており、端部は平坦面をなす。S-67は、裾端部近くに沈線がめぐり、その上にすかし窓をあけている。

壺 (S-68)

S-68は、張出部からの出土である。胴部の下半部は回転ヘラ削りで、やや肩がはる。口辺部を欠くが短い直立する頸がつくものと思われる。

甗 (S-69)

S-69は、ほぼ完形の甗で壁消より出土した。球形状の胴部は肩がはり、直線的に外反する頸部には櫛目波状文が施されている。

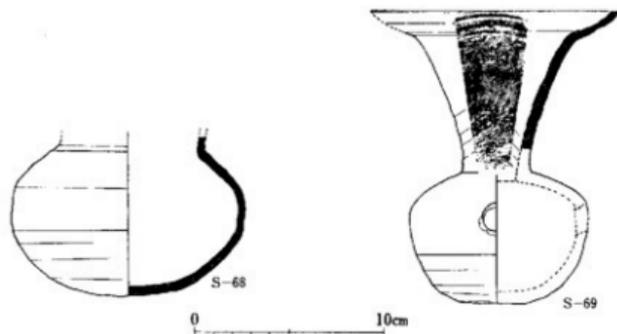


Fig. 23 第4号住居跡出土須器実測図(2) (縮尺1/4)

土師式土器 (H-24~28) (Fig. 24 Tab. 12 PL. 18)

壺形土器 (H-24)

H-24は、くの字形に外反する口縁を持ち、端部は丸くおさめている。第2号住居跡出土のH-16に比して、胴部は球形状をなさず、口縁部のつくりも異なる。

高環形土器 (H-25, 26)

H-25は、壁溝からの出土で環部の屈曲は中位より下にあり、したがって長い口辺部となっている。H-26は、脚部で床面から出土した。H-25とは接合しないが同じような環部がつくのであろう。

手握ね土器 (H-27)

H-27は、厚い器壁を持つ手握ね土器であるが、口辺部は強く押えて直立する口縁をつくる。

鉢形土器 (H-28)

H-28は、口縁が長く急に外反しているが、形態的には第1号住居跡H-9と類似している。

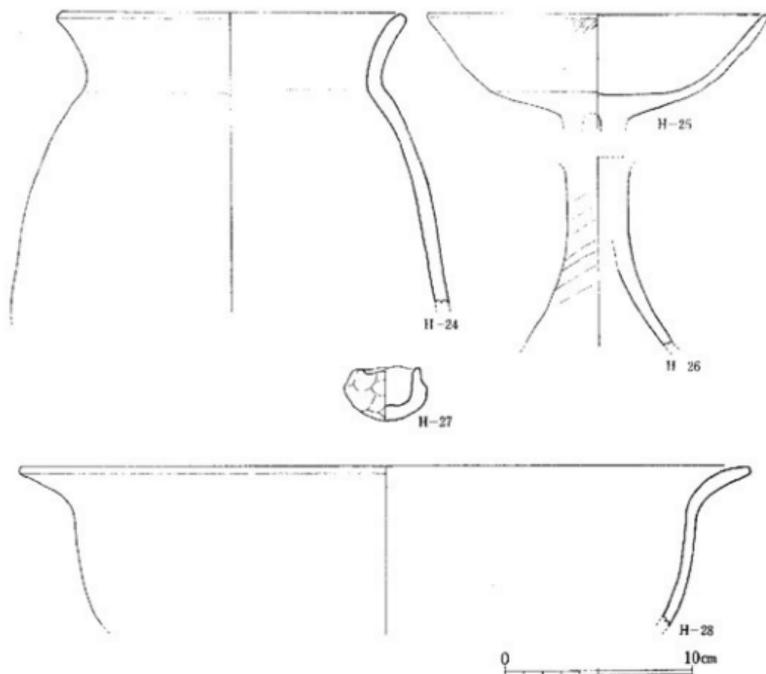


Fig. 24 第4号住居跡出土土師式土器実測図 (縮尺 $\frac{1}{2}$)

Tab. 11 第4号住居跡出土須恵器一覧表

(単位cm 単位は省略)

No.	出土位置	器種	形部(残存部)	法量	形態の特徴	手法の類型	胎土	焼成	色調	備考(形状)	図	頁
S-52	竈土	16番	全部の尻を残す	口径 12.4 器高 4.6	丸みのある縁部を持ち口縁部は直立する。口縁部内面には筋はない。	大井部の裏側には唇部を占め、その一つの筋はない。	灰	中心	内外面 白灰色 灰褐色	図記不明	22	17
S-53	竈土	17番	全部の尻を残す	口径 12.8 器高 4.3	大井部は平明に近く、縁部はその上下に洗筋を持つのみである。	大井部に裏筋を持つ。口縁部は直立し、高部はS-52に比しきりに丸い。	灰	普通	内外面 灰色	図記不明	22	17
S-54	竈土	16番	全部の尻を残す	口径 13.8	大井部を欠くが丸みを帯びたものであろう。口縁部内面には筋はない。	大井部の裏側には唇部を占め、その一つの筋はない。	灰	中心	内外面 淡灰色	図記不明	22	
S-55	竈土	17番	全部の尻を残す	口径 13.0	水平の受部に唇の低い立ちあがりがつく。洗筋は平明に近い。	底部中心に細筋の洗筋がありここより裏側が丸くなる。	灰	普通	内外面 灰色	図記不明	22	
S-56	竈土	16番	全部の尻を残す	口径 13.0	受部水平で縁部丸みを持つ。立ちあがりは中程で縁部と上のびる。	底部の裏側には唇部が丸くなる。立ちあがりの洗筋はない。	灰	普通	内外面 灰色	図記不明	22	
S-57	竈土	16番	全部の尻を残す	口径 14.0 器高 4.6	縁部平明すぎ、尖部は縁部より大きく傾斜し斜め上方に出る。	底部の裏側には洗筋、受部、立ちあがりの洗筋は細く出る。	灰	普通	内外面 灰色 灰褐色	図記不明	22	17
S-58	床面	17番	全部の唇部を欠くがほぼ完全形	口径 11.3 器高 4.3	縁部小さく受部は上向く。立ちあがりは内側すのろで縁部と出する。	底部内面に平明が丸くなる。洗筋の裏側には唇部に残される。	灰	普通	内外面 灰色	図記不明	22	17
S-59	竈土	17番	立ちあがり部を欠くがほぼ完全形	口径 13.8	受部の中上方にのびる立ちあがりも傾斜が大きい。	唇部内面に平明の裏側が丸くなる。洗筋の裏側には唇部が丸くなる。	砂粒	灰	内外面 灰色 灰褐色	図記不明	22	
S-60	床面	17番	わずかに立ちあがり部を欠くが完全形	口径 13.8 器高 4.6	受部は膨大し縁部丸い立ちあがりは長い。	立ちあがりは唇部で内側すのろのびで縁部は丸く立ちあがりをつける。	砂粒	普通	内外面 灰色 灰褐色	図記不明	22	17
S-61	床面	高16	高部の唇部で全部の尻を残す	口径 15.6 器高 9.0	上向きながらも縁部を持ち内側すのろで唇部がつく。内面に段。	大井部の唇部を占め唇部を占め、上部につまみをつける。	砂粒	普通	内外面 灰色	図記不明	22	17
S-62	竈土	高16	口縁部の唇部を残す高部の裏	口径 18.8	口径大きく縁部に洗筋の洗筋がめぐる。底部内面には筋はない。	大井部の唇部には唇部で洗筋の裏側は唇部が丸くなる。	砂粒	普通	内外面 灰色 灰褐色	図記不明	22	
S-63	第1-2号住居跡竈土	高16	唇部の唇部を残すのみ	口径 10.2 器高 2.5	口縁部は外側に立ちあがり、唇部は3分の1にすかし筋の跡。	唇中に2本の洗筋がありその下の下方に筋の斜線がある。	灰	普通	内外面 灰色	図記不明	22	
S-64	竈土	高16	唇部の唇部を残す	口径 14.0	唇部は洗筋の跡で段がつくが唇部6分の1に筋を持たない。	唇部は洗筋の跡で段がつくが唇部6分の1に筋を持たない。	砂粒	普通	内外面 灰色	図記不明	22	
S-65	竈土	高16	唇部の唇部を残す	口径 13.0	唇部は洗筋の跡で段がつくが唇部6分の1に筋を持たない。	唇部は洗筋の跡で段がつくが唇部6分の1に筋を持たない。	砂粒	普通	内外面 灰色	図記不明	22	
S-66	竈土	高16	唇部の唇部を残す	口径 12.0	唇部は洗筋の跡で段がつくが唇部6分の1に筋を持たない。	唇部は洗筋の跡で段がつくが唇部6分の1に筋を持たない。	灰	普通	内外面 白灰色 灰色	図記不明	22	
S-67	竈土	高16	唇部の唇部を残す	口径 13.0	唇部は洗筋の跡で段がつくが唇部6分の1に筋を持たない。	唇部は洗筋の跡で段がつくが唇部6分の1に筋を持たない。	砂粒	普通	内外面 灰褐色 灰色	図記不明	22	
S-68	床面	高16	唇部の唇部を残す	口径 12.4	唇部は洗筋の跡で段がつくが唇部6分の1に筋を持たない。	唇部は洗筋の跡で段がつくが唇部6分の1に筋を持たない。	砂粒	普通	内外面 灰色	図記不明	23	17
S-69	竈土	高16	唇部の唇部を残す	口径 13.4 器高 9.5 器高 15.6	唇部は洗筋の跡で段がつくが唇部6分の1に筋を持たない。	唇部は洗筋の跡で段がつくが唇部6分の1に筋を持たない。	砂粒	普通	内外面 灰色 灰褐色	図記不明	23	17

Tab. 12 第4号住居跡出土土師式土器一覽表

No.	出土位置	器種	器の部(残存部)	法量	形勢の特徴	手法の特徴	(単位cm 番号は埋蔵層)				
							胎土	造法	色	測 Fig. PL	
H-24	竪溝	壺	胴部の下半を欠く	口径 18.0	胴部は球形状をなすがややふため、口辺部は「く」の字形に外反する。	口辺部は内外面とも縁ナア。内外面内面には欠くがないが縁線が入る。	砂粒	普通	内外面 黄褐色	24	18
H-25	竪溝	酒注	胴部を欠く 杯部は完整	口径 18.0	杯部は平底で器底してやや内寄りに口辺部をつくる。口縁部は横ナアで内寄りのみ。	器底のための内外面とも器底部不鮮明だが口部内面は朝目が見えぬ。	良	普通	内外面 黄褐色	25	18
H-26	床裏	高杯	杯部と脚部を欠く	基部径 3.4	杯・脚と形態、手法ともに類似するが脚部形状はやや細い。		良	普通	内外面 黄褐色		24
H-27	竪溝	子瓶と土師	わずかに口縁を欠く	口径 3.4 器底 2.8	器底は光面でもみがあるが口縁部はややくびれており直立する。	内面は「拳」ナア。口部内面は強く横ナアしくびれ部をつくる。	砂粒	普通	内外面 黄褐色	27	18
H-28	横溝	鉢	口縁部の片残を残す	口径 38.4	H-9と大きさは異なるが口のほりが少ない。	器底出土のための層層はげしく全面に砂粒が踏出す。	砂粒 多い	普通	内外面 黄褐色		21

鉄製品 刀子 (Fig. 25 PL. 18)

住居跡からの鉄製品の出土は、きわめて少なく第4号住居跡の本例1点のみである。全体的に銹化がはげしく刃部がやや不鮮明であり、茎部のほとんどを欠失しているが、翼は棟まちと刃まちを有しているようである。刀身は平造で背は鋒まで直線、刀身長8.3cm、幅は刃部で1.4cmを計り背は平坦面をなす。茎部は断面は長方形をなすが、やや背側が幅広く、茎部には木質などの残存は認められない。

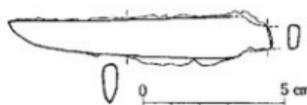


Fig. 25 第4号住居跡出土刀子実測図(縮尺1/4)

Ⅲ区には、2条の溝、4軒の住居跡の外に30数個の小ピットが検出された。これらの中には各住居跡に関連するものもあると思われるが住居跡の上部構造を明確にしえる資料を欠いているので、速断は避けるべきであろう。ただ福岡市内でも水田への宅地化が急激に進むとともに低湿地遺跡の発掘調査が多くなり、西区湯納遺跡、鶴町遺跡、四箇遺跡などで礎築材の発見が相次ぎ建築史学からの検討も行なわれているので住居跡の上部構造が明らかになるのもそう遅いことではなからう。Fig. 26の菓玉は、住居跡外の小ピットより出土したもので、長さ1.9cm、最大部径1.2cmを計る。上下両面は平行でなく孔径は、1.4mmと小さく、黒色の石製である。

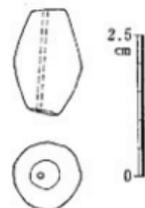


Fig. 26 Ⅲ区ピット出土菓玉実測図(縮尺1/4)

第IV章 まとめ

以上報告した調査結果に基づき、本遺跡の発掘調査の成果と問題点を整理してまとめてみた。本遺跡は狭少な沖積地に伸びる低丘陵の舌状先端部に立地し、遺跡の範囲は発掘調査区を越えてなお西側と北側に広がることは確実である。発掘調査を実施した面積は約930㎡であり、その中で検出した遺構は、ピット群、溝状遺構、柵状遺構、竪穴住居跡などである。

ピット群はⅠ～Ⅲ区にわたって検出されたが、いずれも掘り込みの形態や配置に規則性が認められず、しかも出土遺物も殆んど無いことから、それらの性格や時期については不明とせざるを得ない。

溝状遺構については、Ⅰ区において1条、Ⅲ区において2条を検出したが、Ⅰ区の溝状遺構は、近世の白磁片が出土しており他の遺物は含んでいず畑耕作時のものと思われた。Ⅲ区の第1号溝は、掘り込みが不明瞭で浅く、遺物も須恵器と陶磁器を混在し、人為的な遺構とするよりも自然の落ち込みと考える方が妥当性があるかも知れない。第2号溝については、ハの字形に開き、掘り込みはゆるやかな傾斜をもつ溝であり、溝内に堆積した土層は5層に分けられる。Ⅱ～Ⅴ層より須恵器と土師器を出土するが、層位的な形態上の変化は認められない。北東延長部分の発掘が不可能であり全体の形状は不明である。出土須恵器中に第1号住居跡出土の高坏と同一個体のものがあり、住居(群)を囲む溝としての機能も考えられよう。

Ⅱ区で検出した柵状遺構は、幅約1.2m、長さ10mの溝状の掘り込み底部に、不整形のピットが等間隔に連続して掘られていることで「柵」の機能をもった遺構であると判断した。しかしながら発掘面積が狭かったため、これと関連する遺構などの存在は不明であり、はたしていかなる機能を有していたものか断定できない。出土遺物は、わずかに須恵器の坏蓋1点を数えるにすぎない。この坏蓋は、住居跡出土の須恵器にも認められるA類のもので、須恵器編年ではⅡ期に該当しようが、この遺物をもって柵状遺構の下限年代の一端を示すものと考えるときは、その出土状態からもまた数量的にも不可能で時期決定にとっては資料不足と言わざるを得ない。

竪穴住居跡はⅢ区の中央部から北側に集中して4軒を検出したが、他の遺構の性格や時期の不明明からして、これらの住居跡は本遺跡を特徴づける中心的な意義をもつ遺構であると言える。したがって、以下竪穴住居跡の分析を中心にして本遺跡の問題点を整理する。

竪穴住居の時間的先後関係、並存関係と年代

4軒の竪穴住居跡のうち、全体の形状をはば知り得るのは、第1号、第2号であり、第4号

が全体の約2分の1、第3号はわずかに1つの壁コーナーを知り得るにすぎない。これら各住居跡の切り合い関係は、第1号が第2号を切り、第4号が第3号を切っていることが確かめられ、それぞれ第2号→第1号、第3号→第4号という時間的前後関係を知ることができる。次に平面的な位置関係については、第2号と第3号はその間の距離が約1.2m、第2号と第4号も約2.2mしか離れておらず、上層構造が明確ではないが、これらの組合せによる同時並存の可能性は無いと言えよう。しかしながら、第1号のA壁と第4号のC壁間の距離は約4.6m、同じく第1号の北東壁コーナーと第3号のコーナー間の距離は約4.4mあり、第1号と第3号、または第1号と第4号の各住居が、同時期に棟を並べていた可能性は考えられよう。これらの各住居跡の切り合い関係と位置関係を総合すると、その築造における変遷については、次のような可能性を与えることができよう。

まず、第1号と第4号が同時並存していたと仮定すれば、①第2号または第3号の築造、②第3号または第2号の築造、③第1号と第4号の築造という順序を得る。次に第1号と第3号が同時に並存していたと仮定すれば、①第2号を築造、②第1号と第3号を築造、③第4号の築造という時間的な順序を得る。また、いずれの住居も時間的に先後関係をもつとすれば、④第2号→第1号→第3号→第4号、⑤第3号→第2号→第1号→第4号、⑥第3号→第2号→第4号→第1号、⑦第2号→第3号→第1号→第4号、⑧第2号→第3号→第4号→第1号、⑨第3号→第4号→第2号→第1号という6種類の時間的前後関係の型を想定できる。

これらの住居跡より出土した遺物のうち、確実に時期決定の手がかりとなるのは須恵器であるが、出土状態、数量、形態の諸特徴などから、最も主要な決め手となるのは、蓋坏であるので、それを中心に時期を検討してみよう。まず蓋坏については、第1号においてはA～D類が出土したが、床面からはB類の蓋が出土している。第2号ではB類とC類が出土し、いずれも床面および感溝内において検出されている。第3号では蓋は検出されず、第4号においてはA類とB類を出土し、B類が主体を占めている。また身については、第1号ではA類とB類、第2号ではA類のみが認められた。第3号においてはB類、第4号ではA類、B類が検出されたが、B類が主体である。これらの須恵器を北部九州地方の須恵器編年に適用すれば、蓋については、A類はⅡ期のやや下降する形態のもの、B類はⅢa期、C・D類はⅢb期に比定されよう。また身については、A類はⅢa期、B類はⅢb期に比定できよう。他の器種についても、形態的な特徴はⅢ期に収まるものばかりで、時間的に大きな隔たりを認めることはできない。

以上、各住居跡間の切り合いや位置関係および出土須恵器の編年観から各住居の年代を総合すれば、第1号がⅢa期を中心とする時期、それに切られている第2号もⅢa期、第3号についてもⅢa期、第4号はⅢa～Ⅲb期にかけて営まれていたと考えられ、これら4軒の堅穴住居は、6世紀後半代の時間的にきわめて短い時期に建て替えられたことが推測される。したが

って、この狭い空間に最大2軒の住居が棟を並べていたことは充分に予想され、当時の居住区域における土地利用（分割）上の規制を考える上で有力な示唆を与えるものであろう。

竪穴住居跡の構造について

これらの住居跡の規模と構造については第三章で詳述したとおりであるが、次にこれらに共通する構造上の特徴と問題点を述べる。

第1号住居跡は、地山の傾斜とほぼ同一方向に軸をとる方形プランの住居跡で、主柱穴は4個であり、これら柱穴間の長さは壁長に比例している。柱穴の深さは床面からほぼ一定であり、床面の傾斜（南東→北西）に従い、柱穴底部の水平深度は異なっている。壁溝は断面が逆台形を呈し全周していたと考えられるが、第2号住居跡との重複（切り合い）部分は不明であった。溝の底部に支柱の存在を示すようなピットなどの掘り込みは検出されていない。かまどは傾斜下位のD壁（北西壁）中央部に粘土をもって構築され、支脚などは設けられていない。耕作などによってひどく破壊を受けているために詳細な規模と構造は不明であるが、コの字形を呈していたのであろう。貯蔵穴、張出部などの他の施設は認められない。床は第2号住居跡との重複部ばかりではなく全体的に貼床されており、第2号住居が廃棄されて時間的に隔てることなく築造されたものと考えられる。また、火災による腐蝕などを示す痕跡は検出されなかった。

第1号住居跡に切られている第2号住居跡は、主軸の方位を異にする大形の住居跡であり、プランもやや閉き気味の長方形を呈する。しかしながら、主柱穴の数、壁溝の有無、かまどの付設、貯蔵穴の有無など、その基本的な構造においては第1号と全く共通する特徴をもつ。ただ細部における相異は、柱穴の位置が第1号に比べてより正方形に近くなっていることであり、柱穴間の距離と壁長がかならずしも比例しない点である。かまどの残存状態は良好で、プランはロの字形、支脚等の付属物は無い。その構築にあたっては、竪穴および壁溝を掘った後かまどの位置の床面をレンズ状に掘り、粘土をもって形をなしたことが知られる。また煙出し部はその断面から壁際の外側にあったことが観察される。

第4号住居跡は全体の2分の1が残存しているにすぎないが、構造的には第2号に共通するものと思われ、やや長方形に近いプランで主柱穴も4個であることはまず確実であろう。ただこれらの柱穴の位置は壁際に近くっており、柱穴間の距離は、4軒の住居跡のうち最も長い。かまどの付設については、削り落とされている北側崖面に焼土層と第1号住居跡のかまどより出土した鉢形土器（H-9）とよく類似した形態をもつ土器（H-28）が検出されていることなどからA壁（北東壁）に付設されていたものと考えられる。

第3号住居跡については全体の構造は全く不明であるが、出土遺物は時期的に近いことを示しており、ほぼ共通する構造であったと考えられる。

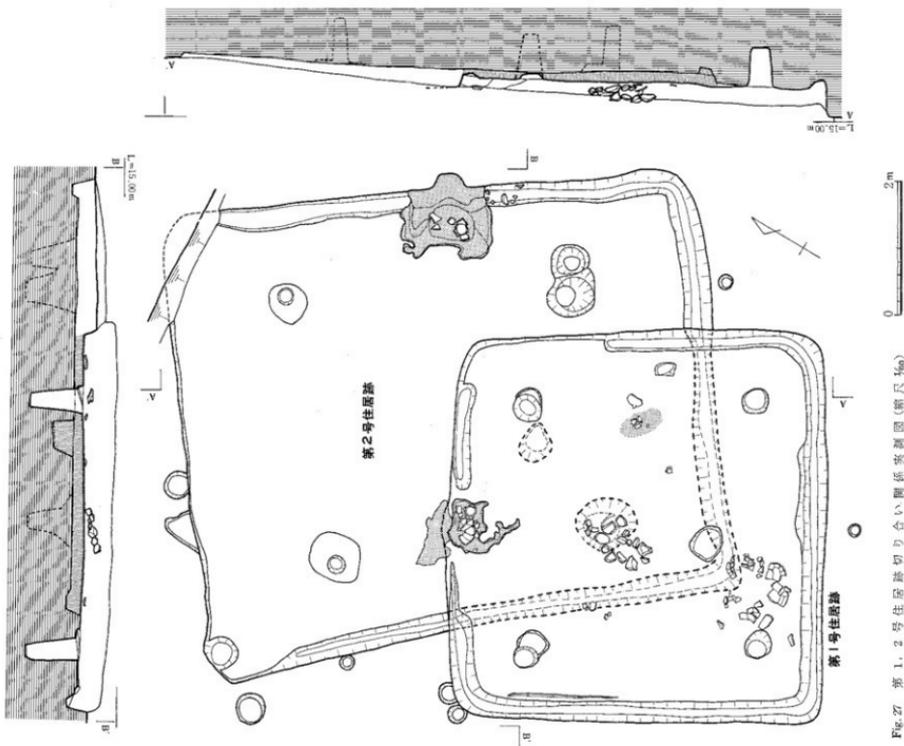


Fig.27 第1, 2号住居跡跡切り合い關係平面圖(簡尺1/50)

さて、これらの竪穴住居跡は第1号、第2号住居跡において典型的に示されるように、方形プラン、または方形に近い長方形プラン、主柱穴が4個、およびかまどを付設するという共通する構造上の特徴をもつと言える。すでに指摘しているように、これらの住居跡間には、竪穴と主柱穴間の長さに一定の規則性は見出されないが、このことは同時期の他の類似遺跡における住居跡においても同様であり、少なくとも竪穴の掘り込みと主柱の配置との関係に統一した規準はなかったと考えられる。特に本遺跡検出の4軒の住居跡は、建て替えがごく短期間に行なわれたことが推測されることから、その建て替えの原因を明確にする必要があるが、各住居の設計、つまり床面積や主柱穴の配置、上屋の構造などは、その住居の家族構成、および住居群(集落)におけるその家族の地位や性格、住居内の空間利用等による違い、さらには建築材などによる規制などさまざまなことが原因となって各々異なる設計がなされたものと思われる。いずれにしても上屋を含めた全体の建築学的構造については、最近各地で調査例を増しつつある低埋地遺跡出土建築材の分析と共に今後明らかにされるであろう。また、かまどを付設する点では、古墳時代後期に全国的に定着する現象とされるが、その出現時期は九州地方以外では、古墳時代中期に遡る例があり、特に山陰地方ではすでにこの時期に移動式の土師製かまどが知られている。九州地方においては、古墳時代のかまど付設住居跡は最近福岡県を中心に出土例を増しつつあり、須恵器の福年でⅢA期以降に集中しているようである。またⅢ期以前に遡る確実な出土例としてⅡ期の太宰府町実の田遺跡が知られており、さらに1976年10月に調査された隈岡市西新町遺跡においては、弥生時代終末期に属する方形竪穴住居跡の壁コーナーに粘土を用いてかまど状の施設を設けている例が発見されている。しかしながら、西新町遺跡例をもってかまどの初原の形態とし、これが引き続き古墳時代に発展的に継承されたとするにはいまだ資料不足と言わざるをえないであろう。なお、造り付けかまどから移動式の土師製かまどへの転換時期については、山門郡瀬高町鉢田遺跡で奈良時代の遺物と共存する土師製かまどの例が知られているが、一方では同時期の福岡市有田遺跡、福岡市上和自遺跡においては造り付けかまどが存続している。また筑紫郡太宰府町成風形遺跡の調査例では、7世紀後半から8世紀後半にかけての3軒の竪穴住居跡が知られ、造り付けかまどから移動式土師製かまどの転換期は8世紀の後半頃に求められている。

このように本遺跡の発掘調査は、時間的な制約から狭い発掘面積となり、検出した遺構も少なかったが、4軒の住居跡とこれに関連するものと思われる溝や柵状遺構の掘起す問題は多く、これからの九州地方における古墳時代の住居跡および集落の研究にとって示唆に富む遺跡として意義づけることができよう。しかしながら、この種の研究課題として真に追求されるべきことは、検出した住居跡の住人、つまり集落の構成員がいかなる人達であったかということであろう。このためには、まず集落の規模を明らかにするために広範囲な発掘調査をする事も

必要であろうが、緊急調査という枠づけの中での発掘では不可能なことであり、むしろ各住居跡における個別的な検討、つまり住居の構造、建て替えの原因とその時間的推移、さらには、出土遺物における器種、数量、組合せ、出土状況なども住居の隆陥、埋没、あるいは(食)生活を通しての左遷形態など多面的に有機的な関係をなすのであろうからこれらを徹密に検討してこそ住居(集落)を営んだ人達の生活とその意識構造に肉迫できるものと思われる。

- 註① 九州地方の須惠器の編年は小田富士雄氏を中心に進められ、ここでは氏による編年に依拠した。
- ② 石野博信「考古学から見た古代日本の住居」(大林太良編『日本古代文化の探究「家」』社会思想社)1975年
- ③ 青木道跡発掘調査団『青木道跡発掘調査報告書Ⅰ』1976年
- ④ 九州地方における古墳時代かまど付竈型穴住居跡の発掘報告例は次のようなものがある。
- 筑紫野市大曲り遺跡5軒 福岡県教育委員会『福岡県バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集』1970年
- 同 野黒坂遺跡17軒 同上
- 筑紫郡大守府町社田遺跡1軒 同上
- 八女郡広川町平原遺跡2軒 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅲ』1972年
- 筑紫野市八咫遺跡6軒 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ』1976年
- 小郡市宮裏遺跡6軒 福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅴ』1974年
- 鞍手郡岩宮町田尻遺跡1軒 福岡県教育委員会『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第1集』1976年
- 福岡市有田遺跡4軒 福岡市教育委員会が1976年に発掘調査。1977年調査概報書発行予定。
- ⑤ 太宰府町裏の山遺跡 福岡県文化課酒井仁夫氏の指示による。1977年報告書発行予定。
- ⑥ 福岡市の地下鉄建設に伴う発掘調査で、現在も調査途中にある。折尾学氏の指示による。
- ⑦ 錦山 猛「土師質甕の新例」(九州考古学会『九州考古学1』)1967年
- ⑧ 有田遺跡調査団『有田遺跡第1次発掘調査概報』1967年
- 有田遺跡調査所『有田遺跡』1968年
- ⑨ 福岡市教育委員会『和白遺跡群』1971年
- ⑩ 亀井明德『成塚形遺跡古代住居址発掘調査報告』1970年

あとがき

片江辻遺跡を発掘調査してから1年余を経たいま、ようやく本書を発行することになりました。図面や出土遺物の資料整理期間中には、他の業務を兼任するなどいく度となく作業を中断せざるをえませんでした。どうか報告書としての体裁をもって上梓することができたのは、多くの人達のご協力と、整理補助員の花畑照子、高倉栄美さんの労によるものですが、短期間の資料整理だったために編集者二人の対論も満足になしえず、けっして学術的な内容をもった報告書とは言えません。

まとめの章にも記しているように、発掘調査にあたっては、考えられるあらゆる問題点と可能性を基にして作業を実施しましたが、今回の発掘調査は、考古学における「学」としての発展段階とそれに規定された調査方法、発掘技術によるものであって、本遺跡のすべてを語りうる結果を得たというわけではありません。このことは冷静ながらも敬慎のための調査、遺跡を破壊したということを示しています。むしろ、前記したように学術的なことのみから言えば、その発展段階と可能性からして、今日的な水準による方法と技術で発掘調査を実施し、またその結論を出すことは不自然なことではなく、容認されることなんでしょうか。だからこそ開発行為に対して発掘調査（記録保存）によって処理しようとする現在の行政側の対応策、いわば発掘至上主義は、もっとも危険性があり、埋蔵文化財に対する罪悪的行為であると断定せざるをえません。

私達埋蔵文化財にかかわる者にとって、発掘調査記録を迅速に公にすることや、はたまたまに学術的な資料の集積や検討を加えた内容にするかという事も重要なことでしょうが、いわゆる報告書偏重の傾向ではなく、真の目的は、いかに遺跡を守り、発掘件数や面積を少なくしていくかということであり、ここに拠点を設定しない限り将来に向けての記録（報告書）は出現しないのではないかと考えます。このような意味からして、本書は報告書として不完全であり、発掘担当者としての責を痛感しております。しかし幸いにも、区園整理組合のご厚意により第一次調査の片江6～8号墳は保存され、さらに今回の調査では、遺跡が区園整理事業の板幹になる道路部に位置していたために保存することは不可能でしたが、周辺部に遺跡は拡がり、また事業地内にはほかにも多くの遺跡が知られていることなどから区園整理組合は積極的に埋蔵文化財保存に反対していくという姿勢をこめて遺跡説明板等の記念碑を片江辻遺跡に建立するということになり、大いに感謝しています。来年度も継続して西地区（豊橋宮）の発掘調査を予定していますのでどのように区園整理事業と対応し、保存という型で組みとめるものかなどをお互いの共通する課題として協議を重ねていきたいと思っていますし、編集者二人の敬謝とし、これからの指標としたいと思います。

(塩屋・力武)

図 版



発掘作業員のみなさん（昭和50年12月
第2号住居跡内）



片江辻遺跡周辺航空写真（昭和49年4月撮影 縮尺1/15,000）



1. 片江辻遺跡航空写真 西側より (昭和51年6月撮影)



2. 片江辻遺跡航空写真 南側より (昭和51年6月撮影)



1. 1区全景



2. 第1トレンチ



3. 第2トレンチ



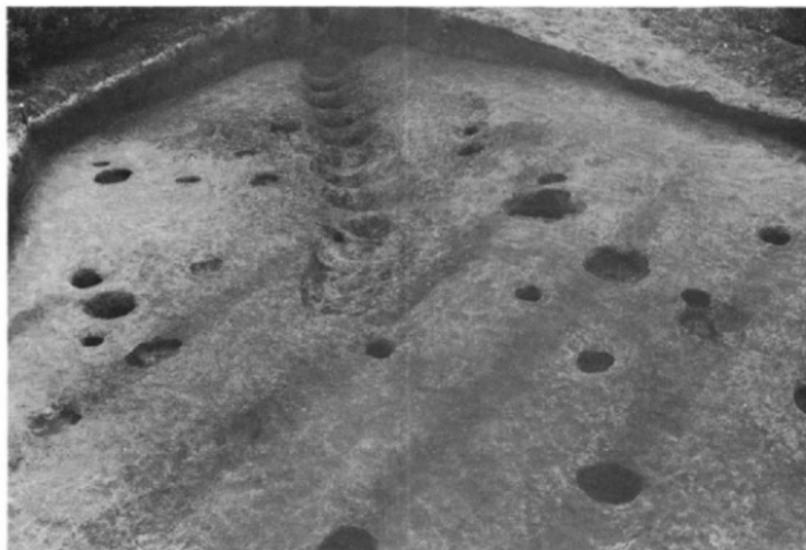


1. II区発掘作業風景

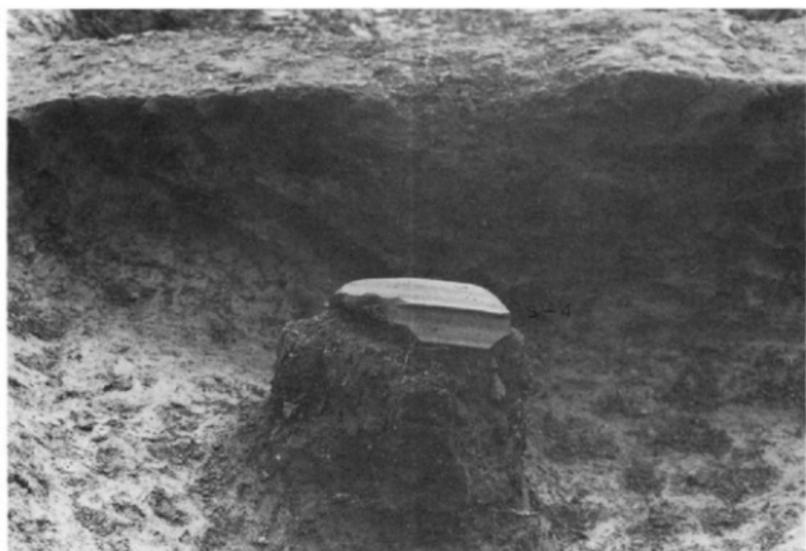


2. II区遺構全景





1. 櫛状遺構 南側より



2. 櫛状遺構土器出土状況





1 Ⅲ区遺構全景 南側より



2 Ⅲ区遺構全景 西側より





1. Ⅲ区第2号溝



2. 第2号溝土層断面





1. 第1号住居跡



2. 第1号住居跡かまど



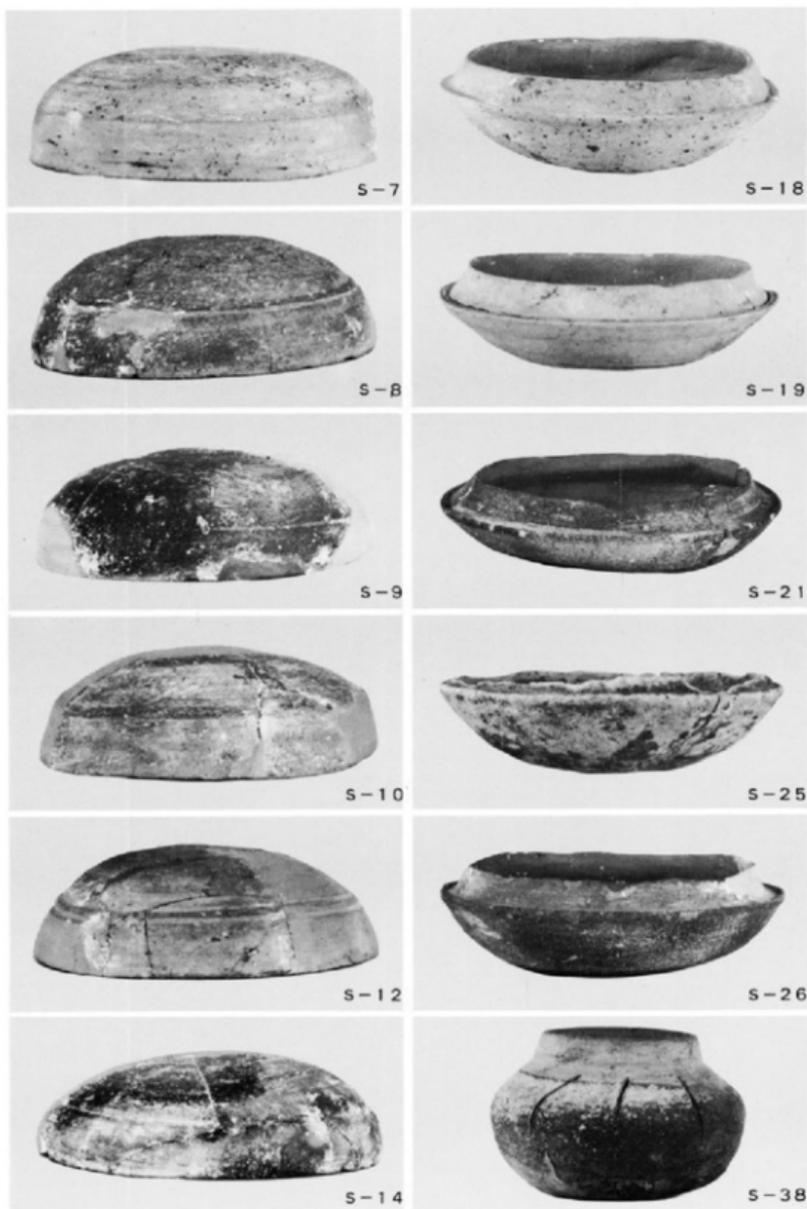


1. 第1号住居跡遺物出土状況 (B壁)

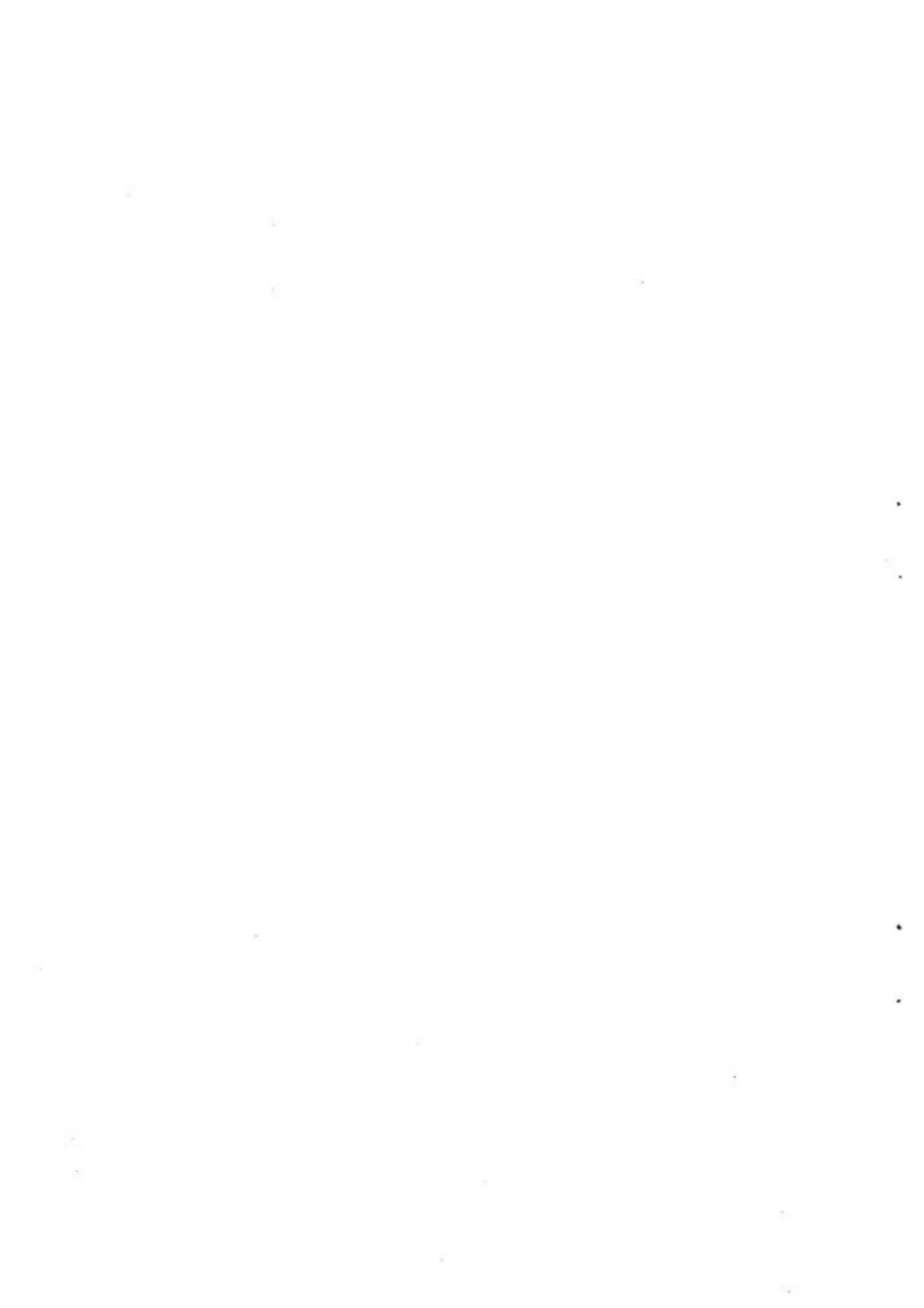


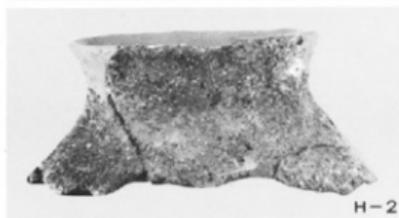
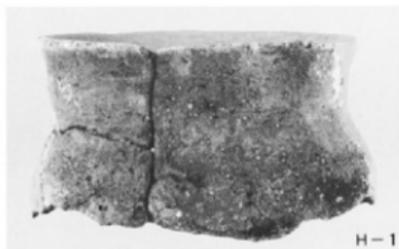
2. 第1号住居跡出土石製品 (縮尺 2/3)





1. 第1号住居跡出土須恵器





1. 第1号住居跡出土須恵器

2. 第1号住居跡出土土師式土器





1. 第2号住居跡



2. 第2号住居跡





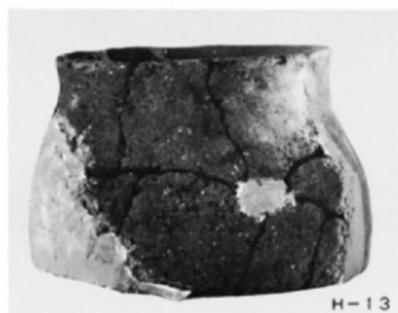
1. 第2号住居跡かまど



2. 第2号住居跡かまど断面



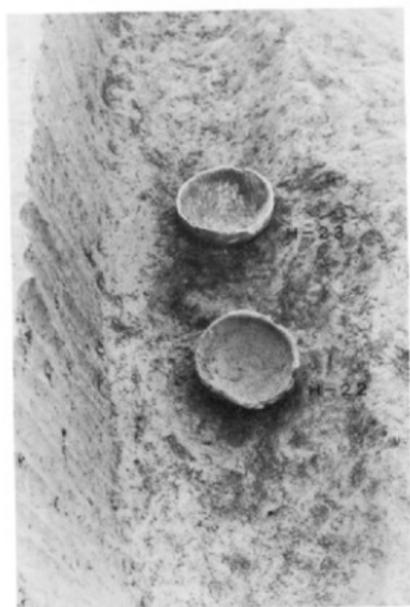
1. 第2号住居跡出土須恵器



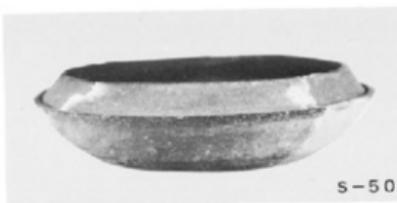
2. 第2号住居跡出土土師式土器



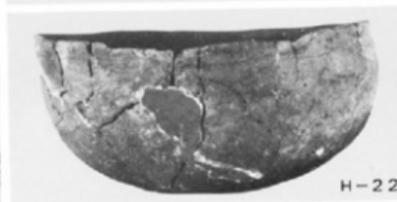
1. 第3号住居跡



2. 第3号住居跡遺物出土状況



S-50



H-22



H-23

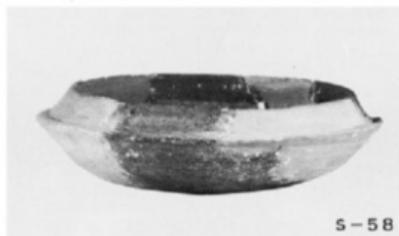
3. 第3号住居跡出土須恵器・土師式土器



1. 第4号住居跡



2. 第4号住居跡



1. 第4号住居跡出土須恵器



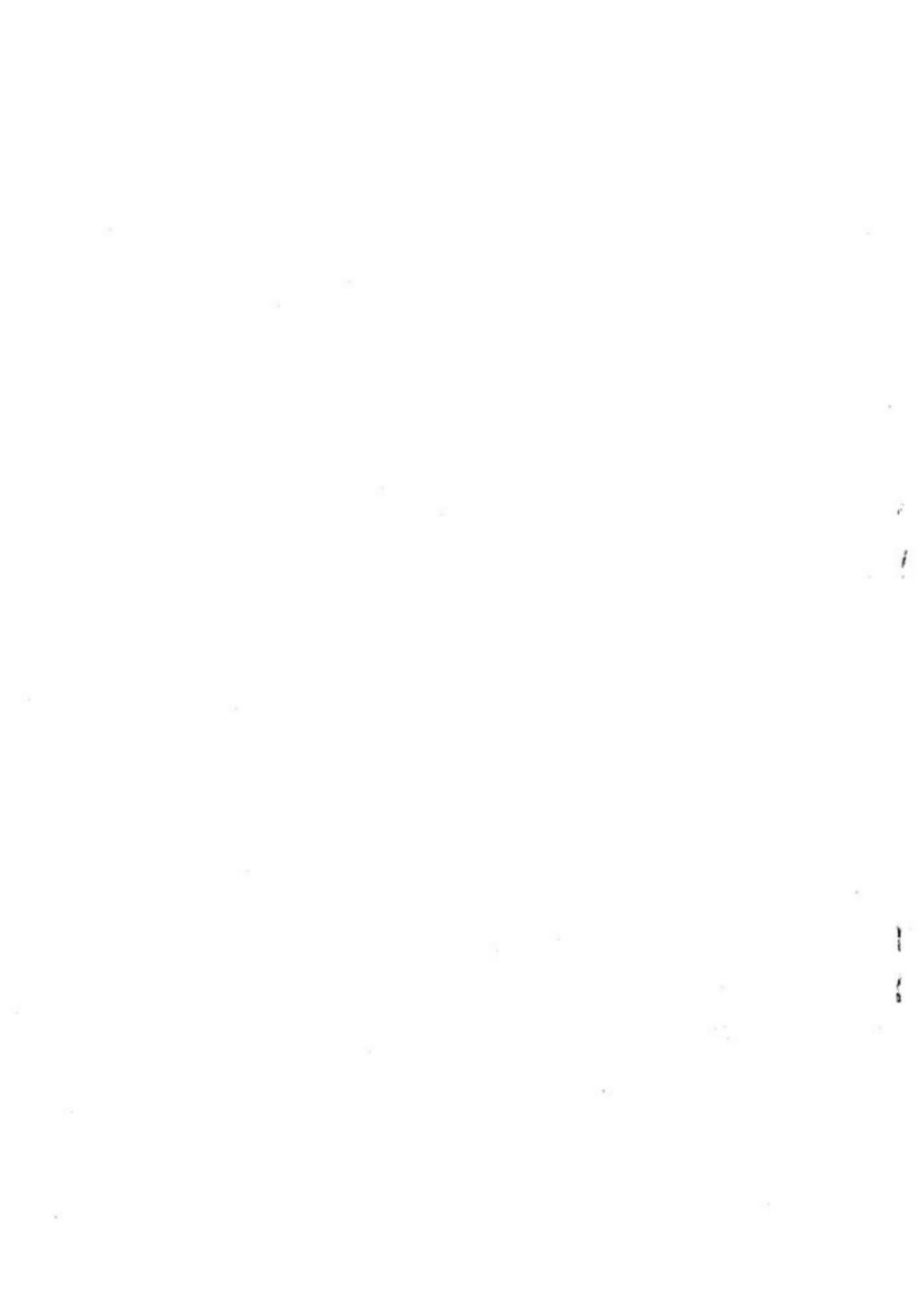
1. 第4号住居跡遺物出土状況



2. 第4号住居跡出土土師式土器



3. 第4号住居跡出土鉄製品



福岡市西区片江

片江过遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第40集

1977年（昭和52年）3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目7-23

印刷 祥文社印刷株式会社
福岡市博多区博多駅南4丁目15-17

